
Unnamed child

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unnamed child

【Nコード】

N0402X

【作者名】

sakura

【あらすじ】

全米を震撼させたケース・アングリーボマーと呼ばれる事件があった。その事件を引き起こしたのは「マジックボム」と呼ばれる少女姿の殺人鬼。ケース・アングリーボマーと呼ばれる過去の事件は現在へとつながり、そうして犯罪者たちによって構築される裏社会へと多くの人間たちをいざなっていくのだった。【改訂版】

当作品は犯罪サスペンスになりますが、基本的に殺人鬼の主人公アリッサの精神的成長に焦点をあてた作品となっています。ちなみに作者的にはオッサン×ロリっ子を推奨しています。

序章

高層ビルの窓辺に少女がいた。

少女の、姿は驚くほど幼い。

地上十三階にあるその部屋の窓は、頑丈なはずのガラスはあっけなく破れ、高層階ならではの強風を室内に招き入れる空洞と化している。

金色の長い巻き毛をたなびかせて、銃を構える捜査官たちを見据える。

暗がりの中に輝く水色の瞳はまるで悪魔の持ち物であるかのようにも見えた。

「しつこいわね」

短くつぶやいた少女に三十代の男性捜査官が、拳銃を構えた照門の向こうで片目を細めた。

「君が逃げなければいいだけのことだ」

ドスを利かせた声で男に言われて、少女はひらりと肩の上で片手を振る。

そんな彼女の一挙一動に、銃を構えているはずの男たちが動揺していた。しかし、銃口を向けられているはずの金髪の少女はそんな男たちに動じることもなく視線を滑らせる。

口元に拳をあてて、少女はこころと笑った。

「しつこい男は嫌われるわよ？」

「別に、俺たちは君に嫌われても一向に構わないから問題ないな」

低く告げられて少女は目を上げる。

「ふうん」

外見だけならば、ハツとするような美少女だ。

白い肌の、金色の巻き毛。水色の瞳はまるで湖面を思わせる静寂をたたえており、長いまつげは二重の目を彩っている。

その頬はバラ色で、その辺の美少女コンテストに参加している子供たちとは一線を画していた。

着ている服がその辺から奪ったのだろう大人物のシャツなどであれば、誰もが見とれてしまうほどの美少女であることに間違いない。

「……つまんない男ね」

肩をすくめた彼女は、まるで相手を小馬鹿にするような表情を浮かべてから、ちらと相手の男たちを見やった。そんな彼女の目線一つにすら緊張が走る。

彼女はそれすら楽しんでいるように感じられた。

事実、彼女はそんな大人たちの反応を楽しんでいたのかもしれない。

つまらない、と言いながら彼女は手を伸ばした。

無造作に少女の隣に立ち尽くしていた四十代の女の胸ぐらを引き寄せた。

そう。彼女は人質にされていた女だ。

アメリカ合衆国が時には非情な決断を下すことを捜査官の男たちは知っているが、現実として目の前に恐怖に震えている人質の女性を前にすると良心が痛んだ。

なによりも、危険に晒されているのは人質だけではない。

捜査官たち全員が、目の前の少女と対峙していることによって自分の命を危険に晒しているのである。

多くの犠牲を払いながら、アメリカ連邦捜査局は目の前の少女をやっと数フィートの距離にまで追いつめた。

もしかしたら、次は自分が死ぬ番になるのかもしれない。そんなるくでもない可能性すら、頭の片隅をよぎる。捜査員たちは、すでに自分の命を犠牲にする覚悟などとくにできていたのだ。

「あんまり近づくと、こいつを殺すわよ」

型どおりの脅し文句をつぶやいた少女が小さく口元を歪める。

その邪悪さは、いったいなんだろう。

白い肌の、金色の巻き毛の、かわいらしい姿をした悪魔は、月明かりに照らされてそこに立っていた。

その場にいる誰もが、これからなにが始まるうとしているのか知りたくない。

「……どうして、こんなことを」

交渉役でもある三十代の捜査官が固い声音のままで問いかける。

「どうして……？」

少女は、まるでそんなことを聞かれること事態が意外だったとも言いたげな表情で小首を傾げて見せた。

「どうしてって、つまりそれはどういうこと？」

「君は誰よりも賢明で、判断力も持っているはずだ」

見かけ通りの子供ではないのならば。
そう言外に告げられて、金色の巻き毛の少女は不愉快そうに眉をひそめた。

「だというのに、どうしてこんな破壊衝動につき動かされるようなことを繰り返すんだ」

静かに、説得するような男の言葉が、少女の勘に障った。
知識人が犯罪を犯さないわけではないことを、男は知っている。
しかし、時にはこうして相手を説得することもあった。

犯罪者の感情を揺さぶるために、捜査員たちは慎重に言葉を選ぶ、
「君がなにに対して不満があるのか、我々にはわからない。だから、話を聞いてやるからその人を離してくれないだろうか？」

当たり前だ。

目の前の小さな少女がなにに対して不満を抱いているのか、捜査官たちにはわからない。

どうしてこんなにも幼い子供が犯罪に手を染めなければならないのか。

「あんたたちなんか理解してもらいたいなんて思っていないから心配いらないわ」

言いながら少女はにっこりと笑った。

その笑顔はあまりにも艶やかで、瞳を奪われる。

彼女が微笑を浮かべた瞬間に、バリと空気がはぜた音が響いて、再び緊張した空気が室内を駆け抜けた。

「こ、殺さないで……」

まるで泣くような声が、人質の女の唇から漏れる。

おびえきったその声に少女が金色の眉毛をつり上げたのが見えた。

「お黙り」

ぴしゃりと女の言葉を封じるように言い放つ。

幼い外見に、成熟した精神、そして天才じみた判断力と知識。

それらは金色の巻き毛の少女を構成するものであったが、ひとつの個体の中に存在するにはあまりにもアンバランスでどこか異様なものを感じさせてならない。

黙れと告げられて、女は次の言葉を発することもできないまま硬直してしまった。

おそらく、彼女は誰かしらの殺害現場を目撃してしまったのだろう、と捜査官は考えた。そうでなければその怯えようは考えられなかった。

普通の人間であれば、金色の巻き毛の少女をみただけではそのまま連続殺人犯という本性をみきわめることは難しいだろう。

実際のところ、ほとんどの捜査官たちも「そう」だ。

自分の目の前で、非常識な殺害現場が再現されなければ誰も目の前の幼い子供が殺人犯であるとは考えなかった。

「何人殺せば、気が済むんだ……」

苦々しげな男の声に、少女はふわりと笑う。

天使のほほえみ。

そなたとえても良かったかもしれない。

「……どうせ」

歌うように彼女が告げる。

「どうせ、あんたたちにはわからないわ」

そう言った瞬間、火柱があがった。

少女の横に、青い炎の柱があがる。

「ブリース、だっけ？」

炎の光が、少女の横顔を照らし出す。まるで作りもののめいた彼女の横顔に、捜査員たちはぎょっとした表情のままで目の前の悪魔にも似た子供を見つめた。

サタンの生まれ変わりがいたならば、こんな姿をしているのではないかとすら思わせる。

突然名前を呼ばれて三十代の男の捜査官は少女を凝視した。

「どうして俺の名前を……」

「秘密」

訝しげな眼差しの男、ウィリアム・ブリースに少女はいたずらっぽく笑う。

右手の人差し指で自分の唇を辿った彼女は、青い光に照らされている。

悲鳴も上げることなく、生きたまま炎に包まれた人質の女は、おそらくあつと言う間に絶命したのだろう。立ち尽くしたままの姿でこつこつと青い炎に包まれている様はまるで松明そのものだ。

それこそが、彼女の恐ろしさだ。
正体不明の殺人鬼。

「……あ」

呆然と炎を見つめていた捜査官の誰かがうめくように声を漏らす。
また、ひとり死んでしまった。

そんな無力感。

どうしたらいいのかもわからない。

まるで無敵の魔法使いにでも対峙している気分になる。銃など構えていても、とても勝てる気がしない。

魔法と、銃のどちらが強いかと尋ねられれば、答えは言わずもがなである。

どんな仕掛けがあるのかはわからない。

しかし、目の前の小さな子供が意識を「そちら」に傾けるだけで、彼女の意志によって炎が灯る。そしてその強さを自在に操る様は、まるで炎をつかさどる神のようだ。

そんな者を「普通の人間」が武器を片手にして勝てるのか……？
言葉が見つからずに黙り込んだブリースに、少女もなにも言わない。

「……どうして、殺したんだ」

彼女を。

なにもしていないじゃないかと、咎めるブリースに金色の巻き毛の少女は身じろいだ。肩にかかる長い髪を軽く払った。

「わたしの、ターゲットだからに、決まってるでしょ」

まるで嘲弄するように少女が笑みを浮かべる。

「どうして、君は殺すんだ……」

うめくように、同じ言葉を繰り返す。

どうして殺さなければならないのか。

どうして死ななければならないのか。

「……どうして」

拳銃を構えたまま問いかけるブリースの声はかすれていた。

もうすでに何人の人間が死んだのかわからない。

目の前で救えなかった命をいくつ数えただろうか。彼女を逮捕するための方法も思いつかず、ただ時間を待つように相対するしかない。

無作為につつこんだところで、捕らえるどころか自分が火柱に包まれることは目に見えている。だから、安易につつこめない。

「ちょっと、どいてくださる？」

ふと人混みをかき分けるようにして若い女の声が聞こえた。

十代半ばほどだろうか。

頭髮はやはり金色で、瞳は灰色だ。

当たり前だが、ブリースの知らない女性だ。

ブリースに「こんばんは」と言ってから、窓際に立つ少女に笑顔を向ける。

自分よりもずっと年上にも見える灰色の瞳の少女にしか見えない女を見つめて、金色の巻き毛の少女は言葉を失ったようだ。

嫌悪感に瞳がゆがんだ。

水色の瞳に憎々しげな色が宿る。

「君は……？」

「ペンタゴンから人がくると、ブリース捜査官は聞いていらっや
いませんか？」

静かに灰色の瞳の少女が言う。

体に合わせて作られた制服はおそらく特注品だろう。

「……では、君が？」

「わたしはマリア・スミス、階級は少佐になります」

そう言いながらも彼女は、視線を少女に固定したままだ。

こんなにも若く見える女性の階級が少佐であるということに驚き
を隠せない。

「これは、失礼しました。少佐殿」

「やめてください、階級は一応もらっているだけです。正体はただ
の軍の狒犬ですから」

マリア・スミスは自分よりもずっと背の高い男を見上げて微笑し
てみせた。

「それよりも、今は目の前の彼女のことです」

背中に届くだろう長い髪を無造作に束ねているマリアは一步踏み
出した。

膠着状態に陥った状況を打破するために、国防総省が派遣した陸
軍特殊部隊の戦闘員。

確か、そんな情報が捜査員たちに伝えられたのは半日ほど前のこ
とだった。

なるべく早く合流する、ということしか捜査官たちは聞いていな
かったため、自力で殺人鬼の少女を追いつめたのだが、追いつめた

からと言ってその先をどうにかできるなどとは考えていなかった。

「取引を、しませんか……？」

マリアが静かに語りかける。

「取引、ですって？」

「そうよ、取引。あなたはとても頭の回転が速いから、言葉の意味くらいは理解しているでしょう？」

感情の起伏が感じにくいマリアの言葉を、巻き毛の少女が聞いていた。

そもそも、目の前にいる子供に対して「少女」という言葉が適当なのかすらわからない。

少女と呼ぶには幼すぎる外見の、そんな子供。

「悪いようにはしないわ」

マリアは言う。

まただ、とブリースは思った。「また」型どおりの言葉。

目の前にある現実の内側、そのどこかになにかとてつもない真実が隠されているかのような。そんな言葉。

「あんたの言う悪いようにしないで、どういふことよ？」

棘の含まれた少女の声に、マリアは柔らかく笑う。どこからどう見ても軍人であるようには見えない。

「言葉通りの意味よ」

あなたは愚か者ではないでしょう？

告げる彼女に、少女がフンと鼻を鳴らす。

「悪いけど、まだやりたいことがあるのよ」

「つまり、交渉決裂ってことになるのかしら？」

「そーいうことねっ！」

言い放つと、彼女は絨毯の敷かれた床を身軽に蹴りつけた。

音もなく、彼女の体が宙を舞う。そこは、地上十三階だ。

強い風が吹き付ける窓枠に立った彼女はまるでいたずらでもするかのような表情を浮かべると小首をかしげた。

「バイバイ」

ひらひらと顔の横で右手を振った。

彼女は言っているのだ。「まだ、追ってこい」と。

「あんたが、そっちにいるってことはわたしの手の内はお見通しってことなんだろうからさ」

彼女が言い終わるか、言い終わらないかというところで、突然爆風と同時に視界が赤く染まった。

それは血液の赤ではない。熱のこもった、強い風圧。

衝撃波だ。

顔を両手でかばいながら思わず目をつむった彼は、衝撃波が通り過ぎてから、そろりと目を開くと、陸軍の士官の女は大きく目を見開いたままで熱風の中に立ち尽くしていた。

真っ赤な光が彼女の横顔を照らしている。

目の前の殺人鬼の少女が何者なのか。そして、自分の隣にいる軍服の女が何者なのか。

爆炎と強風の中に窓枠に片足をかけている少女を見つめる軍服の女の表情の中には焦りなど見られなかった。

ただ、事態を冷静に見守っているようにも感じられる。
決して焦ってなどいない。

少女は窓の外へと身を躍らせる。
勝算があるからこそ、彼女は飛び降りたのだ。そんなことは、そこにいる捜査官たちとマリアにはわかっていた。

少女姿の、金色の巻き毛の殺人鬼。彼女がそんなことで死ぬわけがない。

彼女は死なない。

「逃がしちゃったわね」

窓の外に消えた殺人鬼の姿に、マリアは肩をすくめた。見下ろすと地上で派手な爆発が見える。なにをしているかは明白だった。彼女が退路を確保するために、爆発を起こしているのだ。

「……あなたがくれば、彼女を逮捕できるかと思っていたんだが」
ため息混じりに銃をホルスターに戻しながらヴィリアム・ブリースが言えば、マリア・スミスは帽子を頭から外しながら息を吐き出した。

「わたしは、彼女の火を封じ込められるわけではないから、そんなことをわたしに期待しても無理よ」

マリアが苦笑する。

「しかしあなたは、マジックボムを捕らえるための秘密兵器だと聞いているぞ？」

「……そうね、そうかもしれないけど。わたし”たち”は、彼女の前型なもの。どうすることもできないわ」

そう言うと、マリアは踵を返す。

人差し指と中指で挟んだ名刺をブリースに手渡してから、彼女は律動的に歩き去った。

白い名刺には素っ気なく所属と、電話番号、そして名前が書かれていた。

不可思議なのは彼女の所属だ。

「心理作戦部隊、第〇〇〇チーム所属？」

〇が三つ並んでいるということは、要するに存在しないということなのではないだろうか？ そんなことをブリースは思う。

そもそも心理作戦部隊というのは陸軍特殊作戦軍団に所属する部隊で、そのほとんどを予備役で構成されている部隊である。かの有名なグリーン・ベレーや第七五レンジャー連隊などもここに所属している。

その中でも心理戦などに長けるのが彼女の所属しているだろう。「心理作戦部隊」なのであるが、その中に〇〇〇チームなどという部署があるなどと聞いたこともない。

「……マジックボムってやつはいつたいなんなんだ」

陸軍の特殊部隊が動くと言うことは、なまなかではないということだ。マジックボムを追いかけていながら、一向にそれらの事件の真相が見えてこない。

彼女は全米を転々としながら人を殺して回る。

そのターゲットになる人物はほとんどが高名な研究所の研究員であつたり、企業の役員であつたり、また、政治家であつたりする。どんな基準で彼女が殺しているのかも不明なため、彼女は無差別殺人を犯す連続爆弾魔であるというのが世間一般の常識だった。

手の中の名刺をスーツの胸ポケットにしまいこみながら、ブリスは捜査官たちに撤収の指示を出した。

どちらにしたところで、目の前の殺人鬼が逃げてしまった以上は、そこにいてもなにかをどうすることもできないのである。

大きなため息をついたヴィリアム・ブリスは、金色の短い髪をかき回した。

その事件が、後に「ケース・アングリーボマー」として語り継がれるようになるとは、ヴィリアム・ブリスは知るよしもない。

ケース・アングリーボマーによって、人々は隠された禁忌の存在を知る事となり、そうして全ての元凶になるのだということを、世界の人々はまだ知らなかった……。

ケース・アングリーボマーこそが、全ての始まりなのだということを。

第一章 カルメン 1

陸軍特殊作戦軍団、心理作戦部隊第〇〇〇チーム。

そこに在籍している隊員はただひとり。名前をマリア・スミス。しかし、彼女の正体は不明。一説によれば、五十年ほど前から第〇〇〇チームは存在していると言われていたが、当のチームに在籍している隊員は常にたったひとりとされた。

「……以前、事故がありましたな」

長身の黒人男性に話しかけられて、マリア・スミスは小さく首を傾げた。

「事故、ですか？」

コーヒーの入ったマグカップを手渡されて、マリアは灰色の瞳で曖昧に笑う。

「ええ、病院を狙ったテロ事件だった」

物憂げな男の言葉に、ゆるやかにうねるハニーブロンドを背中に流して彼女はかすかに目を細めた。そうして男の言葉の先を待つ。

彼はマイケル・ウィンストン。

アメリカ合衆国でも精神科の権威としてFBIに捜査協力をしている。

そんな彼の黒い瞳を見つめたマリアは襟元に指先で触れた。

「……大変な事件で、多くの優秀な医師や看護師たち。スタッフの

命が奪われた……」

大きな人的損失だった。

淡々と話を続ける彼の話の邪魔をせずにマリアは無言で頷くばかりだ。

本来であればそこは相づちを打つべきだったのかも知れない。

「そのとき、捜査に訪れたFBIと共にきた女性がいたが、その人もマリア・スミスと名乗っていた」

「そうですか……」

彼の言葉を最後まで聞いて、マリアは彼の言葉の意図を悟った。
マイケル・ウィンストンは彼女に言っているのだ。

彼が、以前出会ったマリア・スミスとは何者なのか、と。

「もう、予想できていると思いますけれど、マリア・スミスというのは、第〇〇〇チームに在籍する隊員の偽名です」

マリアの説明に、ウィンストンは神経質に目を細めた。

その瞳は、まるで鋭利な刃物のようで、そんな彼の様子にマリアはマグカップに唇を寄せる。

「マリア・スミスとは、何者なんだ？」

「目の前にいるじゃありませんの」

ふわりとほえんだマリアは、金色の睫毛をじつと伏せた。

「ごめんなさいね、わたし、わたしの前のマリアのこと知らないの」

くすりと彼女はほえむ。

自分の前のマリア。

彼女の言葉の意味がわからない。

「わたしが知っているのは、わたしの前のマリアは四人いたというだけ。それ以前のマリアから引き継ぎをされたわけでもないし、以前のマリアがどうなったのかも、わたしは知らない。もしかしたらわたしの次のマリアも、わたしのことを知らない、ということになるんだと思いますけれど……」

とつとつと話すマリアは、コーヒークップの黒い水面を見つめている。

その瞳がなにを考えているのか、ウィンストンにはわからない。

「知りたい、とは思わないのか？」

「……別に、わたしは知りたいとは思わないわ」

ほほえみながら首を傾げた彼女は、落ちかかる髪を指先でかき上げた。

「知りたいと思うのは人の欲求。わたしは、あなたたちと同じ人ではないから、あなたたちのように知りたいとは思わない」

たったそれだけのこと。

彼女はそう言って微笑する。

なにを考えているのかわからない。

「ドクター、あなたはわたしのことなんて理解しなくてもいいんです」

理解などできなくても、「マリア・スミス」はアメリカ合衆国の味方なのだから。

歌うように彼女は言った。

「わたしの前のマリアは四人。けれど、それまでのマリアはとても短命だったから、わたしがマリア・スミスという名前を名乗るようになってから、もう随分たつわ……」

「マリアの任務というのはなんなんだ……？」

「……それは」

クスリと金髪の彼女はほえんだ。

「わたし”たち”の任務はあなたたちが決めることよ」

外見には似合わない、老成した落ち着きを感じさせるマリアは半分ほどになったカップをデスクに置いてから手元のファイルを指先で触れた。

「今回はFBIの依頼です」

「……そうだったな」

まるでたった今思い出した、とでも言いたげなウィンストンの台詞に、マリアが笑った。

「我々が、メサイアの出勤を依頼したんだったな」

メサイア。

それは第〇〇〇チームのコードネームだ。

メサイア、と呼ばれる理由が、マイケル・ウィンストンにはなんとなくわかったような気がする。

「在籍しているのが、マリアだから、部隊のコードネームがメサイアというのだな」

納得したように顎に自分の指先で触れながら頷けば、マリアは静かに笑う。

「準備ができたようだ」

慌ただしくオフィスに入ってきた青年に、ウィンストンが座っていたデスクから立ち上がった。

「そのようですね」

厳しい瞳に戻ったマリアは、ウィンストンに続いて立ち上がる。
通された取調室には二十代半ばほどの青年がいた。

「……彼は？」

「先日、DCPDで駐禁で拘留した男なんだが、どうも怪しくてな」
「……」

後ろ手に手錠をはめられて、猿ぐつわをかまされている。そして椅子にくくりつけるように縛られている様子はまるでどこかの捕虜のようだ。

片目を細めたマリアはガラス越しに男を見つめる。

「怪しい、というのはどういうことですか？」

たかがその程度で捕まえた男の捜査に対して、国防総省のメサイアに捜査依頼をするとは考えられない。

「言葉のままの意味だ。そうでなければ、わざわざ駐禁程度でメサイアの出勤など依頼しない」

「そうですか……」

取調室に続く扉のドアノブに手をかけた、黒人の男にマリアは無言のままで後に続く。

中に入ると、男は少しばかり驚いた様子でふたりを見つめた。
確かに、奇妙なふたりと言えはそうなのだろう。

スーツ姿の黒人の大男と、陸軍の制服を身につけた少女。

少女とも言えるが、彼女が「少女」ではないことを知っているのは、室内にいるのはウィンストンとマリアだけで、目の前で束縛されている男はなにも知らない。

だから、彼は驚いていた。
なぜ自分の前に、陸軍の制服を着た少女などがいるのかと。
そう思った。

「……う？」

猿ぐつわをかまされたせいで言葉など出ない。青年はじっと彼女を見つめている。

「ドクターは、その辺にいてください」

ああ、と言った彼は、折りたたみ式の椅子を引き寄せて、そこに浅く腰掛けた。これから、なにがはじまるのかとか、そんなことはマイケル・ウィンストンにはわからない。

これから、彼女がなにをするのか。

コードネーム、マリア。

そう呼ばれる彼女の所以。

ウィンストンの視線の先で、マリアは目を閉じた。
ぐしゃりと空間が歪んだ。まるで上から思い切り押しつけられるような、そんな圧迫感を感じたような気がして、ウィンストンは眉間を寄せる。

なにが起こったのか理解できない。
時間にしてどれだけだっただろう。

「もういいです」

マリアが告げた。

「もういいのか？」

「充分です」

ウィンストンが時計を見れば、彼女が取調室に入ってからまだ十

分もたっていない。

たったそれだけの時間でマリアはなにをしたのだろうか。

捜査の手法を根本的に覆す「マリア」に隠されたものとは何なのだろうか。そんなことを考えていると、彼女はくると踵を返した。オフィスに戻ってからの彼女は端的に言うところだった。

「彼は、最近、どうも過激な連中に目をつけられたようです。うまい口車に乗せられて、ほいほいついていったら、軽いマインドコントロール下に置かれていたようです。行動のトリガーになるのは、金髪の少女を見ること、だったようですが、たまたまそれが発覚する前にDCPDによってご用になった、と」

そして、言動がやや支離滅裂だったために、マイケル・ウィンストンまで報告が上がり、今回、彼を通じてマリア・スミスが出動するという事態にまで発展したのだった。

「金髪の少女、ですか……」

しかし、金髪の少女など山ほどいる。

「もしも、洗脳が作動していたらどうなったんだ？」

問いかける彼の声がかすかにかすれた。

「そこまではわからないわ。ただ、彼らは闇雲になにかを探していた」

なにを欲しているのかはわからない。

「君は、我々を裏切ったりはしないんだな……？」

「心配しなくてもいいわ、わたしはそうデザインされていますから」

そう言って彼女は笑った。

*

不愉快だと、「彼女」は思った。

「彼女」がそう感じている。

「……あの子の、思いはとてもダイレクトに伝わってくるわね」
マリアは苦笑する。

「とても純粹で、とてもまっすぐ……」

わたしたちとは、違う存在。

そつと笑って、マリアは青い空を見上げた。

流れ込んでくる意識の大群を、まるで押しのけるようにして「声」
が聞こえる。

あなたの名前は誰かしら……？

灰色の瞳を細めた彼女はそうして流れ込んでくる声に耳を傾けた。

「わたしの邪魔をしないで……！」

ばかり、と空気が爆ぜた。

あまりにもリアルな声に、マリアは意識を引き戻す。
そう。「彼女」に深入りするのは危険だ。

「あなたはなにを望んでいるの？」

「わたしは、なにも望んでいない」

「嘘つきね」

マリアは聞こえてくる声にそつと笑った。

嘘ばかり。

「あなたが望んでいることは、わたしたちも同じように望んでいる

こと。わからないはずはない」

誰もいない空間を見つめて、彼女はそっと笑うばかりだった。
まるで、止まることを知らない時間のように、時代が動き出す...。

セリオは、カウンターでむっつりとしたままフレンチトーストをつついている金色の巻き毛の少女を見やった。

ホットミルクとフレンチトースト。

豪華なサラダはガラスのボウルの中で山になっている。

デザートとしておかれたフルーツは、小さく食べやすいサイズにカットされている。

少女が眉をひそめているのは、彼女が小食なためだ。

実際の所、彼女の体は燃費が良すぎるために、どれほどたくさん食べてもあつという間にエネルギーとして消費されてしまう。

もっとも、その原因をセリオはわかっているつもりだった。

場合によっては彼女は学校に行っていない年齢と言っても通じてしまう姿をしているが、学校が休みだとか、ホームスクールに通っているからと言った言い訳が常に通じるわけでもない。

就学年齢の少女の親である年齢の大人たちは得てして過敏なものだ。

中には力尽くで彼女を「保護」しようとする人間がいる。

「おなかすいてないんだけど……」

ため息混じりの彼女の声に、セリオは自分の灰色の髪をかき回して微笑する。

彼女の前で煙草を吸わないのは、少女の体に一応配慮をしているからだった。

「昨日は、結構いいところのレストランでも行ってたんですね？」

尋ねられて少女は肩をすくめる。

「大した話じゃない」

彼の言葉の先を制して、アリッサは黙り込む。

そんな彼女を追求したところで、絶対に口を割らないことを知っているセリオはやれやれと肩をすくめた。

まるで軽口をたたくように、中年の男が口を開く。

「今度、俺の依頼も聞いてくださいよ」

「いやよ！」

彼女はぴしゃりと一蹴する。

ブルーブラッドと呼ばれると呼ばれる仲介屋。主に、殺し屋や情報屋など。その筋の裏社会と呼ばれる犯罪者たちに仕事を仲介している。

「わたし、あんたたちみたいな奴らの依頼は受けないことにしているよ。どうせろくなことじゃない」

ふん、と鼻を鳴らした彼女は横目で仲介屋の男を睨み付ける。

水色の瞳、金色の巻き毛。

整った顔立ちを持つはつとするような美少女。

不可思議に感じるのは、彼女が外見よりもずっと年齢を重ねているようにも見えるところだ。実際のところ、セリオとアリッサは知り合ってから随分たっている。

しかし、彼がアリッサのなにを知っているかと問われれば、性格と容姿しか知るものはない。

「残念ですね」

にっこりと笑うヒスパニック系の中年の男は、FBI本部にほど近い場所にあるカフェのオーナーだが、「仲介屋」というセリオの裏の顔を知っている捜査官たちはたびたび彼の店を訪れる。

そして、来店する客と、ウェイトレスたち、そしてオーナーのセリオを監視している。

もっとも、そんなことはセリオにとってはどうでも良いことで、捜査官たちが店を訪れても飄々としてごく普通の客として、彼らに接しているようだった。

「そもそも、なんであなたはこんなところに店を構えてるのよ」

あきれ顔の少女に、セリオは品の良いグラスを布巾で拭きながら、手早く料理の道具を片付けていく。

「そりゃ、あなたがこの近所に住んでいるからに決まってるじゃないですか」

「普通はあんたたちみたいな奴らって、警察官なんて嫌いなんじゃないの？」

自分のことを見事に棚に上げた冷ややかなアリッサの瞳に、セリオはほえんだ。

「わたしだけじゃないでしょう……？」

穏やかな中年の男の言葉。

そんな男の言葉を受けて、少女は鋭く舌打ちをした。

そう。

それは少女と男のことだけではない。

ワシントンD・C.には少女やセリオだけではない。驚くほど多くの犯罪者が生活している。もちろん、そのほとんどは軽犯罪や衝動的な犯罪に手を染めるだけの一般人だ。

しかし、少女やセリオのようにそうではない者も一部だが、いるにはいる。

彼らは裏社会と呼ばれる、特殊な犯罪者だ。

「……つまないわね、あんた」

「そうですか？」

男は苦笑してから、彼女の進まない朝食を見やった。

「アリサ」

「なに」

名前を呼ばれて少女は剣呑とした目を上げる。しかし眼差しほど彼女が機嫌が悪いわけではないことを、彼は長いつきあいからよく知っていた。

「食事はおろそかにしないでください」

「うるさいわね」

口うるさい親に咎められているような気分にもなるのか、少女は忌々しげに眉をひそめた。

彼女と彼は親子ではない。だから、説教などされる謂われは全くなかった。

「……アリサ」

静かにセリオがもう一度彼女の名前を呼んだ。

もちろん、それは愛称。

彼女の名前は、アリッサ・ノースウッドと言う。彼女がその名前を名乗るようになってからどれくらいたつのか。そんなことをセリオは思った。

アリッサ・ノースウッド。

その愛称だったからアリサ。少女と親しい者は、彼女をそう呼んだ。しかし、彼女を愛称で呼ぶ者はそれほど多くない。

「……」

彼女は、男の呼びかけには答えずに、長い睫毛を伏せて言葉の先を促す。高圧的で、なおかつ不遜なアリッサの態度に、しかし男は怯まない。

「気をつけてください。最近、どうも世間の雲行きがおかしいですからね」

「……ふうん？」

世間の雲行きが怪しい。

それはどういう意味なのかと、水色の瞳が問いかけた。

「俺の情報筋からなんですけどね、あなたのことを狙っている奴らがいるらしい、と……」

「狙う？ どういうこと？」

アリッサが問いかければ、男は無言で肩をすくめた。それ以上のことを答えるつもりはないらしい。

そんな彼の様子に、アリッサはフレンチトーストを刻んだフォークの先を見つめたままで黙り込んだ。

*

これは夢だと、アリッサは思った。

鮮やかなブロンドの巻き毛を揺らめかせて、少女はぼんやりと瞳を開く。

目の前に広がるのは真っ赤な光。

血の色というには透明感が強い赤色。それは、彼女が慣れ親しんできた炎の色。

深紅の光の中で、彼女は手のひらを開いて、じっとそこを見つめる。

「……わたしは」

わたしはどこにいるの……？

ここはどこなの……？

「わたしは、どうしたいの？」

まるで自問自答するように彼女は言葉を繰り返す。そんな彼女の声を、誰かが聞いているわけではない。

「わたしはわたしなのよ……」

自分を定義するのは自分だ。

たとえ、「自己」を定義するためには「他」を認識しなければならぬとしても。

自分という人間を定義するのは、自分なのだと、遠い昔に「決めたのだから」。

真っ赤な、紅蓮に燃えさかる炎の中で彼女は喉をかきむしる。

暗い自分の中心を見つめると、その奥には自覚しようもない不快なものしか見えないようで、彼女は頭を覆う。

見てはいけない。

それを、見つめてはいけない。

「……アリサ」

ふと、呼びかけられる声を聞いたような気がして、彼女は目を上げた。

もしかしたら、自分が認識したのが「アリッサ」の愛称だったというだけで、違う名前と呼ばれたのかもしれない。

誰が、自分を呼んだのだろう。

じんわりと額に汗が浮いていることを自覚した。

片腕を上げて、自分の額を拭った彼女はため息をつきながら肘をついた。

今日も、「また」目が覚める。

目が覚めるということに、彼女は安堵に近い嫌悪感を感じた。

「生きて」いるというのに、この嫌悪感は「何」だろうと、そこまで考えて眉をひそめた。舌打ちをする。

「目が覚めたとたん舌打ちとは色気がないな」

穏やかな青年の声が頭上から降ってくる。

その声に感じたものはやはり不快感だ。次いで感じたものは後頭部に感じた物へ対する不快感。

世界に存在するものの全てが不快だと感じた。

なにもかもなくなってしまうばいいのに。

彼女はそう思った。

「かわいい寝顔だった」

真顔で言われて、少女はようやくしてから上半身を起こすと膝枕をしていた男に一瞥をくれてから額にかかる金髪をかきあげた。リビングのソファでいつの間にか眠っていたらしい。

「名前、呼ばれた」

ぼつりと独り言のようにつぶやいた彼女に、男は左右に首をふる。

誰に、とは彼女は言わない。そして、彼も聞かない。それがふたりの関係だ。

「あんたはいつも目が覚めたときは機嫌が悪そうだな」

告げられて、アリッサは睫毛を伏せた。

「……そう？」

「まるで、目が覚めるのが嫌いみたいだ」
「ふーん」

同居している青年に指摘を受けて、彼女は視線を滑らせた。輝くブロンドが彼女の頬を覆うように緩やかに巻いており、瞳は

湖水を思わせる水色だった。

年の頃は十歳よりも少し下といったところだろうか。
ただ単に寝起きが悪いために彼女が機嫌が悪い、というわけではないことを彼は知っている。

「でも、どうだっていいでしょ、そんなこと」

「そりゃまー……」

彼に告げられた通り、アリッサは目が覚めることが嫌いだった。
特に目が覚める瞬間が不快でたまらない。

できれば永遠に目が覚めなければいいとさえ思う。
そう感じる。

だというのに、彼女はいつも目が覚める。

「名前を呼ばれたって？ 誰に？」

新聞を読んでいた男がちらりと視線だけを上げたが、少女は肩をすくめてみせた。

「夢を見たような気がしたけど、もう忘れた……」

夢の内容など覚えていない。

そして、夢の中のことなど、彼女にはどうでも良かった。

誰でもそうだろう。夢の内容など、起きればすぐに忘れてしまうのが人の常だ。

「夢なんて見ても、世界はなににも変わらない」

しかし、人は救いを求めて夢を望む。それを、人の弱さと呼ぶのか、それとも儚さと言うのか。

冷ややかに吐き捨てた彼女はそうしてテレビをつけた。

「テレビ好きだな」

「……暇なだけよ」

やることはない。

彼女はいつものことだが暇だ。

ボーイフレンドがいるわけでもない。

話す相手は同居している青年か、時折連絡が入る「依頼者」か、もしくは司法機関や警察機関の人間くらいだ。

アリッサ・ノースウッドは特別だ。

少女は眉間にしわを寄せたままテレビの画面を見つめていた。
二時間ほどたった頃だったか。

電話が鳴った。

もちろん、少女は無視だ。

電話になど見向きもしない。デジタルな呼び出し音が続いている。

「電話でてよ」

「……なんで俺が」

「わたしが出たくないからに決まってるでしょ」

アリッサは電話にあまり出たがらない。

そもそも、彼女に電話をしてくる相手など、少女には心当たりがありすぎて受話器を取りたがらなくてもやむを得なかった。

そんな事情を青年は理解しているつもりだったが、理不尽だという思いからは離れられない。

彼女のすばらしく理不尽な回答に青年はため息をついた。

「相変わらず女王様でいらっしゃる」

命令口調を背中に、電話の応対のために立ち上がった彼はかすかな違和感を感じたが、その違和感を口にするのではなく鳴り続ける電話の呼び出し音に受話器を取った。

少女は、彼が電話の対応をしている声を聞きながら、テレビニュースを見つめていた。

彼女の頭の中に刻みつけられた映像が消えない。

声が消えない。

映像も声も、ノイズのように消えていかない。

まるでしじまにざわめくさざ波のようだ。

彼女は、眉間にしわをよせたままで手を握りしめた。

「そういう仕草が子供っぽいんだろ」

昔の仲間に言われたような気がする。

「子供だろうが、大人だろうが、個人の強さには関係ないわ」
そんなことを言った男に、少女はそう告げた。

思い出しながら苛立たしく彼女は親指の爪をかむ。

オレンジジュースを取ろうとして立ち上がった彼女は、すたすたと裸足で床を歩いていった。リビングに続くキッチンの片隅、大きな冷蔵庫を開いてジュースの入った瓶に手を伸ばす。

そのときだった。

本気のナイフが彼女の頭上をかすめるように飛んでいく。
しかし少女は動じない。

「殺す気？」

言いながら振り返った。

手にしたオレンジジュースの瓶が緊張感を削いだ。

「そんなもんであんたは死なないだろ」

青年の投げたナイフが壁に付き立つが彼女は不機嫌なままで頼りなでようとする大きな手を払いのけた。

「子供扱いしないで」

おまえのどこにそんな権利があるのだと、彼女は告げる。

「はいはい」

彼女はいつも機嫌が悪い。そもそも機嫌が良いところを見たことがない。

「レオン」

突然名前を呼ばれて男は視線を向けた。

「おまえ、どうしてこんなわたしとつるんでいるの？」

正体不明の女。

青年の記憶にある限り、彼女と知り合ってから以降、少女の姿が変わったという印象がなかった。おそらく身長も変化がないだろう。一方的に青年、レオナルドだけの身長だけが伸びた。

「……さあ？ どうしてだろうな？」

真面目に尋ねられると返答に窮する。

少なくとも、彼は彼女を気味が悪いだとか、恐ろしいだとか、そんなことを考えたことがなかった。

「…怖くないの？」

怖くないのか。

気味が悪くないのか。

彼女はそう問いかける。

「別に、一緒にいるのが汚いホームレスとかじゃないからな。かわいい女の子なら別に問題ないだろ」

まるでそれだけのことだと言うかのような彼の言葉に、少女は不審の眼差しを向けた。

「ペド野郎って言われたらどうすんのよ」

「少なくとも、あんたにアリスなんて堂々と言える奴なんて俺含めていたとは思えないけどな」

彼女に、幼児だと面と向かって言える相手など何人いるだろう。

小さな愛らしい外見の少女。

容姿は確かに幼女でしかないが、彼女は見た目そのままではありえない。

「あんたはやめてって言ってるでしょ」

気分が悪いわ。

唇をへの字に曲げた彼女は肩を落としてからぶすくれた。

「わかったよ、アリス」

アリス・ノースウッド。

それが彼女の今の名前だ。

本当の名前が何であるのかレオナルドは知らない。

なぜならそれについて彼女が言及したこともなかったからだが、おかた偽名であろうということは察しが付いていた。

「……それで、なんの電話だったの？」

「仕事の」

「そう」

短いやりとりで互いの言いたいことは伝わった。

「今度はどこにいくの？」

「イランに。内容が少し胡散臭かったから、一応話を聞きに行ってくる」

レオナルドがこうやって曖昧に言葉をぼかす時は、依頼内容が不可解なことが多い。

そうして、内容を聞いて自分で処理できる内容であれば、レオナルドが自力で解決し、それができない場合はアリッサに連絡をいれる、という形がとられていた。

要するに、アリッサなどからしてみれば、レオナルドはまだまだひよっこ同然なのである。

「そう」

「必要なら連絡する」

レオナルドの言葉に、アリッサは首を回した。

静かな瞳が彼を見つめる。

「その仕事、セリオを経由していないの？」

彼女の仕事のコントロールをするのは、仲介屋のセリオと、同居人のレオナルドだ。

ほかに、彼女に直接アポイントメントをとってくる人間もいないが、ほとんどの場合、アリッサに対する仕事の依頼は、セリオやレオナルドが間に入ることが多い。

「セリオからじゃなかった」

「……そう」

なにか考え込むように唇に指をあてた彼女に、レオナルドは片目をすがめた。

「なに？」

自分を見つめている男の視線を受けて、アリッサは目を上げた。
「なんでもない」

「全てを信じるのは危険よ」

ぼつりとつぶやいて、オレンジジュースをガラスのコップにつきながら無表情で言った彼女は部屋を出て行く後ろ姿を見送った。

「……気をつけるよ」

言い残した青年の声に少女は目を伏せた。

「信用すると痛い目を見てよ」

ぼそりと独白する。

冷たい氷のような水色の瞳が、じつと水道の蛇口を見つめた。
ぼたりと水の滴がシンクに落ちる。

コップのオレンジジュースを飲みながら、ゆっくりと窓辺に歩み寄ると窓外を眺めた。

なんの変哲もない静かなワシントンの住宅街。
変哲がなさすぎて嫌気がさした。

「信用なんてできないわよ。誰も」

独白は室内へと流れて消えていく。

「信用なんてできない。誰も彼も……、わたしも」

そうして彼女は目を伏せた。

信用などしてはいけない。

信用をして、裏切られ、そうして多くの意味で傷つくのは自分だ。自分だけを信用するのだ、と彼女はひとりつぶやく。

幾度となく、そうして彼女は危機的な状況に陥り、そうして窮地を脱してきたのだ。

だからこそ。

「誰も信用なんてしてはいけない」

彼女はつぶやいた。

裏社会の高位者と下位者は、共生関係にあることが多い。

そして、裏社会と呼ばれる犯罪者たちは、ごく一般的な犯罪者たちとは異なり、表だって犯罪者と呼べる人間ではない。

彼らは、太陽の光の下では普通の人間たちとは変わらない顔を持っている。

闇の世界を生きる犯罪者たち。

それこそ、用意周到に。

中には、アリッサ・ノースウッドのように証人保護プログラムを受けている者もいる。

もっとも、彼女が証人保護プログラムを受けている理由というのも、そもそもは世間向けに体の良い理由付けがほしいというだけのことだ。「そういう形になっている」というだけの話だ。

真相は、もっと深い場所にあるということを知る者は、政府中央に近い人間でもそれほど多くはない。

そんなアリッサのもとに初老の男が訪れた。

初老というには、まだ若く、壮年と言ってもいいだろう。

「……またイヤな顔が来たわね」

来客の顔を確認して、アリッサはわざとらしく眉をひそめて見せる。

「そういう言い方はないだろう?」

穏やかな男の声に、金色の巻き毛の少女は不機嫌を隠そうともしないでフンと鼻を鳴らした。

「それで、天下の国家安全保障局のお偉いさんがどんな用?」

まるで揶揄するような彼女の言葉に、アリッサよりもずっと高い目線から見下ろしてくる男は目元でやんわりと笑う。

「わたしが、意味もなくここにくることがないのは、君が知っているだろう?」

問いかけるような彼の言葉にアリッサは、小さな吐息をついてから耳に金色の髪をかきあげた。

「……——」

「こんな話は、玄関口で話すような内容ではないな。中へ入れてくれないかな?」

「……勝手にすれば」

大きく扉を開くと男は、自分の体を扉の開いた隙間へと滑り込ませる。

白色人種にしてはそれほど大柄な方ではないが、一般的な東洋人などと比較すればずっとがたいが良い。

彼の顔を見やってから、アリッサは男に背中を向けた。そんな彼女の後ろ姿を見つめながら、彼は音もなく歩いて室内へと歩を進める。

小さな少女に伴われて歩く壮年の男というのも、見る者がいれば
おかしい光景だと思っただろう。

「……泣く子も黙るNSAの管理職が、わざわざワシントンくんだ
りまで来るってことは相当やばいの？」

ぎろりと目玉だけを動かした彼女は、勝手にキッチンで冷蔵庫を
あさっている男を眺めやる。

「名前で呼んでくれてもいいんじゃないか？」

彼の言葉は、来訪の理由の底に隠された緊張感を削ぐ。
言いながら苦笑した男に、彼女はどさりと音をたててソファに腰
をおろした。

「あんたなんか、あんたで充分だわ」

大きな動作で足を組んだアリッサは、つんと顎を上げる。

「スカートで足なんか組むもんじゃない」

そうたしなめながら、片手にビールを持って少女の組んだ膝に大
きな手でなでる。そうしてやると、アリッサはひどく嫌そうに両目
を細めた。

「触らないでよ」

小さな手で、相手の大きな手を振り払うとうんざりした表情でか
ぶりを振るアリッサは、ふとなにかを思い出したように小首を傾げ
た。

「わたしからはあいつらと接触するわけじゃないけど、あいつら、

「元気にしてる？」

あいつら。

その言葉に、男は低く笑った。

「もちろんだ。君でも、わたしたちのことを心配してくれてるのかな？」

「……あのねえ」

あきれ顔の彼女は、手渡されたトマトジュースのコップを受け取ると唇をつけた。

「メリーランド州から、ワシントンまで来る理由が無駄話だったらさすがに怒るわよ？ こんな時間に」

夜の九時を回っている。

アリッサが起きているには時刻としては少々遅い。

彼女はアメリカ合衆国にとって最も危険な犯罪者のひとりである。しかし、そんな彼女はより多くの政府機関との太いパイプを持っていた。その中のひとりが、今、彼女の目の前にいる男である。

「エリック？」

少女の隣に腰を下ろした男は厳しい眼差しを目前に放ちながら、ビールを注いだコップに口をつけた。

この男がこんな表情をするときは、大概、ろくでもないことが起こる前兆だ。

茶色の髪と、琥珀色の瞳。

男の名前をエリック・ジョーダン。

アメリカ国家安全保障局の管理職だ。

「……そのことなんだが」
壮年の男が言いよどむ。

「君は、アメリカの宗教事情は知っているね？」

「まあ、ある程度はね」

そんなに詳しいわけじゃないからね。

付け足して彼女は肩をすくめた。

どうして、自分の周りにはこんな男共ばかりなのかしら、と口の中ではやいたがすっかり聞こえていた様子で、エリック・ジョーダンは朗らかに笑う。

「ある白人至上主義団体の暗躍によって、キリスト教系の原理主義団体が焚きつけられているという噂なんが……」

「白人至上主義団体とキリスト教原理主義団体？」

いかにも胡散臭げな響きに、アリッサは目を細めた。

「でも、そいつらってあれでしょ？ 一般人の集まりならいつでも返り討ちにしてやるわ」

「……ただの一般人の集まりとしてすむならそれでいいんですがね」
「何が言いたいのか？」

男は見下ろすように視線をおろしてからため息をついた。

「君はなんでも力尽くで解決するようなところがあるからな……。くれぐれも気をつけてくれ」

くれぐれも気をつけてほしい。

男の言葉に、少女はあくびをかみころして、隣の大きな男の体に寄りかかる。

「わかった、気をつけるわ」

そう言つて、アリッサは目を閉じる。

壮年の男に寄りかかったままで深い眠りの谷底へ墜落していく無防備な少女の肩を抱きしめた男は微笑すると、小さな彼女を軽々と抱き上げて、寝室へと運んだ。

次にアリッサが目を覚ましたとき、男の姿は消えていた。

眠たくて仕方がなくて、ジョーダンの話の最中にすっかり眠り込んでしまったのだ。

そういえば、エリック・ジョーダンは、白人至上主義団体とキリスト教原理主義団体に気をつけると言っていたが、そんなものはアメリカ国内だけで数知れないほどある。

アリッサも今までの生活で何度か、そのもめ事に巻き込まれた経験があった。

もっとも、アメリカとはそんな国であるから、気をつけようにも気をつける方法がないのではなからうか、と彼女は思う。

広いベッドの上に起き上がって、大きく伸びをした少女はしわくちゃになった服を脱ぐと、下着姿のまま、シャワールームへと歩いて行く。

熱いシャワーを浴びて頭をすっきりとさせた彼女は、そうしてか

らクローゼットルームへと向かった。

金色の巻き毛を背中赤とピンクを基調にした花柄のシュシュでまとめて、服を選ぶ。

今日はどんな服を着ようかと、クローゼットの衣紋掛けを探った。

かわいらしい服ばかりが納められているが、それはアリッサの趣味ではない。買った人間の趣味だ。

プリーツスカートと白いシャツ。胸元にリボンを結んで、薄での灰色のコートの袖に腕を通すと背中にカバンを背負った。

壁に据えられた鏡を覗き込んだ彼女は前髪を指先で整えてから、自宅の鍵をとるとアパートメントを出た。

機嫌などいつも良くもないし、悪くもない。

機嫌が悪く見えるのは、彼女が常に内側に不満を抱えているためだ。

彼女はいつものように日常に目を向けた。

歩道をとことこと歩く少女はじっと考え事をしたまま車の走る車道に出た。

全くスピードを緩めずに横断歩道を渡ろうとする。

その瞳には、まるで信号など見えていないようだ。

傍から見れば、子供が考え事をしながら道を歩いている、そう見えただろう。

「危ない！」

見知らぬ青年の叫び声に顔を上げた。

同時に体を誰かに抱き込まれたと思った瞬間には、地面から足が離れていた。

太い腕に抱きしめられて、体が横倒しになる。
ひどい衝撃と、聞こえたのはブレーキの音。
そして怒鳴り声。

「……危ねえだろう！ このくそガキ！！」

どこか呆然とその音は耳に入ってくる。

「危ないじゃないか！ 信号はよく見ないと！」
そもそもアメリカで信号など見たところで車道を見なければ意味もないのだが、お約束のように声があった。

スポーツ選手か兵士でもあるような、大柄な青年。

トラックに乗って彼女を見下ろしてなにかをがなり立てているのは柄の悪そうな中年男。

どこにでもありそうな平凡な光景だ。

彼女をのぞき込んだまま怪我のないことを確かめる青年は、ふと少女の体が小刻みに震えだしたことに気がついた。

ダンプロックにひかれそうになった訳だから、少女のその反応はごく普通のものだった。

青年の腕の中で恐怖に震えて嗚咽をにじませる。
堰を切ったように泣き声を上げた子供を抱きしめて、青年は歩道へと渡ると、落ち着かせるように軽く背中をたたいた。

「怖かったな、もう大丈夫」

しばらくしてから泣き声もおさまり、「気をつけて歩けよ」とおきまりの文句でお説教を受けてから、アリッサは赤くなった目元をぬぐいながら歩き出した。

アリッサにとって、日常生活とは計算尽くで占められている。

先ほどの交通事故も計算尽くであれば、あそこで青年が助けに入ることも計算していた。

ごく「まっとうな反応として」泣くことも彼女にとっては造作もないことで、そうやって「普通の子供」を演じなければならない。彼女が「普通」に振る舞っていることは世間では不自然なことだった。

だからこそ、アリッサは計算する。

適度におしゃまで適度に不注意な子供。

それが少なからず面倒くさい、とも感じながら、アリッサはふとかすかな違和感を覚えて背後を振り返った。

先ほどの青年だ。

視線が交錯する。

彼はアリッサを見ていた。

誰だ、と思う間もなくアリッサは認識する。
数年前に出会った少年。

人間とはこうもあっという間に成長するものなのかと、アリッサは思った。

アリッサと目を合わせた青年は、慌てたように追いかけてきてから息を切らせて呼び止めた。

「待って！ ちょっと待って……！ 君、お姉さんが従姉妹でキャシーって人いない？」

「……？」

呼び止められてアリッサは顔を上げた。
肩にかけられた手が重い。

「いませんけど」

「君、名前は？」

「アリッサ。アリッサ・ノースウッド」

思い出した。

アリッサがキャサリン・キーンと名乗っていたときに出会った野球少年だ。

なにかと彼女になれなれしく追いかけてきた少年。

「そっか、似てると思ったんだけど……、気のせいかな」

苦笑した青年を一瞥して、少女はぺこりと頭を下げた。
内心で考えていることと彼女の動きは裏腹だ。

「先ほどはありがとうございました」

品の良い、礼儀をわきまえた子供を演出する。
アリッサにとっては造作もないこと。

「どこの小学校？ 送ってくよ」

「あ、すぐそこです」

言いながら彼女は、視線の先にある芝生の向こう側の二階建ての小学校を指さした。

並んで歩き出した青年につこりと笑ってアリッサは、用心深く相手を伺った。

確か、無駄に勘の良いところを持っていたような気がする。

「キャシーって人と似てるんですか？」

彼女は平凡を装って青年に問い返した。

「うん、気が強くて、生意気でさ。こまっしゃくれたところがあっていつもひとりでいた子だったんだけどすごくかわいい子で」

君みたいだね。

そう付け加えてから、青年はウィンクする。

「でも君は、あの子みたいに生意気じゃないね。すごく礼儀正しい」

生意気で気が強くて悪かったわね。

内心で毒づいてから、アリッサは困ったように微笑した。

実際困ってもいたがそれは口に出さない。

数メートル歩いて小学校の前についた彼女は、ぺこりと彼に一礼する。

「ありがとうございました、いつてきます」

カバンを抱えて学校へと入っていく少女は、そうして今日も変わ

らない日常生活がはじまる。

そのはずだった。

数年前に出会ったはずの男との再会。

きつと意味などない。

アリッサはそんなことを思いながら黒板を見つめた。

授業をする教員の言葉が耳に入ってくる。

ぼんやりとその言葉を聞きながら、彼女は気づかれないように軽くかぶりを振った。

出会いは偶然。

意味など必要ない。

彼女はそうして、平凡な日常を繰り返した。

レオナルドは数日前に仕事に向かった。
それきり連絡がない。

場合によっては、レオナルドのようなひよっこには手に負えない
依頼だったのかもしれない。

裏社会たちは、誰もが自分だけの技術で、その場を乗り切らなければならぬことなど五万とある。

自分の技量を見誤らなければいいだけのこと。驕った者は自ら破滅を手招くことになるのだ。

裏社会に在籍している犯罪者、及び戦争屋たちは連絡手段などない場所で活動することもある。

そんなとき、誰かの援護など期待できるわけもない。
自分の技量と知識だけで乗り切らなければならない。自信がなければそんな仕事をひとりで受けなければいいだけのことであつたし、そもそも死の危険を前にして後込みするくらいならば裏社会に名前を連ねなければ良い、という話にもなる。

自分の命を守れるのは自分だけだということを、裏社会の人間たちは誰もが理解している。

アリッサはちらと鳴らない電話を見つめた。

「わたしは、スーパーマンじゃないわ」

独白した彼女は、そつと長い金色のまつげをおろした。

どこか意味深長な言葉を、聞く者はいない。誰もいない室内に紛れるように消えていく。

誰よりも強いアリッサと共に行動した男たちのほとんどは、交代でもするように、順に死んでいった。

そうして、彼女はまた別の相棒と共に任務をこなす。

「わたしはまた、取り残されるのね……」

誰にでもなくつぶやいて、彼女は息をつく。

アリッサを知る者の数人は「そんなことはない」と言うかもしれないが、それを少女は強く望むようなことはしなかった。そんな、刹那的に生きる彼女の姿はどこかもの悲しい。

変哲のない時間。

変哲のない生活。

アリッサにとって「日常」とは退屈なものでしかない。

退屈な時間の繰り返し。

昔のクラスメートに会ったという、アリッサにしてみれば至極珍しい事態が発生したこと以外は、何一つ変わらない生活が続いている。

リビングのテーブルで黙々と宿題をしながらアリッサは考える。

彼女にとって小学校の宿題などたやすいものではあったが、それは彼女が平凡な日常を送るためには必要不可欠な儀式。近所に住んでいるお節介な「普通のおばさん」に目でもつけられた日にはまた

住む場所を変えなければならない。

アメリカという国には存外お節介が多い。

控えめなノックが響いた。

ドアフォンがあるというのに、わざとらしいノック。
ノックが四回。

それは「彼女」と「彼」の合図。

「……どうぞ」

「こんにちは」

「彼」の声ではない。

鉛筆をくるくると指先で器用に回しながら彼女は考えた。

「あいつは？」

「リート捜査官は明日来ます」

わたしはただの伝達役です。

固い声で青年が告げる。

この家に彼女を訪ねて来ると言うことは、詳細とまでは聞かずとも、アリッサがどんな類の人間であるかは聞いているはずだ。

「あつそ」

若すぎる青年捜査官の言葉に、アリッサは片眉を上げたが、それ以上の追求はせずに、ノートに視線を戻す。

それとは別の質問を少女は青年に投げかけた。

「なにか厄介なことでも持ち上がったの？」

「それは明日にでも本人から聞いてください」

どことなく素っ気なく聞こえる青年の声に、アリッサは声もなく鼻で笑う。

それだけしか言わないならばそもそも自分の所に人をよこす必要などないのではないかと、少女は思う。

要するに、「彼」は「明日行くからよろしく」というくだらない伝言のために人をつかったということなのだ。多忙なアメリカ連邦捜査局にそんなことのために人員を割く余裕があるとも思えない。そもそも、常に人が足りないのだ。

そんなことを考えながら、彼女は、どうして自分がそんなことに気を回さなければならないのかと思考を巡らせた。

そこまで考えてから、なぜだか馬鹿馬鹿しくなっただけアリッサは息をつく。

「あつそ、使えない男ね」

やれやれと、肩をすくめた少女はきつちりとスーツを着込んだ男を見つめてから、不意に男のネクタイを強く引っ張った。

腰を屈める形になった彼の顔が少女の顔に寄せられる。

ペドフィリアの趣味はない青年は自分の唇と、整った顔立ちの彼女の唇とが触れあいそうな距離にぎよっとしたように硬直した。

驚いたように両目を見開いている青年捜査官の鼻先にノートを突きつける。

「教えてよ、おじさん」

算数の宿題。

小学生とは思えない、大人びた丁寧な筆記体が彼の目の前に突き出された。

それは、到底子供の文字ではない。

実際はおじさんと呼ばれる年齢ではないだろうが小学生から見れば二十歳以上の青年などおじさんとひとくりにされてもおかしくはないだろう。

「俺はおじさんじゃない」

「なんでもいいわよ」

一蹴した彼女は、肩にかかる金色の長い巻き毛を手で払いのけた。

「……俺は」

言いかけた彼の言葉を、アリッサは片手で制止する。

「……だからなんだっていいって言ってんでしょ。おまえがおじさんだろうと、お子様だろうと、ね」

大人びた文字。

大人びた台詞。

「あんた、わたしのことを知らないってことは、新人なの？」

鼻しろんだ表情で彼女は、男の瞳を見つめた。

静かな彼女の瞳に、青年がぞつとする。

名前はアリッサ・ノースウッド。

青年はまだ、彼女の機密情報に触れていない。だから、知らない。

「……まだ、捜査官になったばかりだ」
苦々しげな口調の彼に、少女はフフと笑った。

「フレッド・ブリスと言い、あんたと言い、なんでFBIはわたしの所に新人ばかりあてがうのかしら」

まったく、と、ぼやいたアリッサは肘をついたまま、テーブルの下で足をぶらぶらと揺らした。

彼女にとって、彼の年齢などどうでもいいことだった。
興味のないこと。

真剣な表情で算数と格闘する社会人の青年の横顔を眺めてアリッサははっと息をついた。

最終的に、「おじさん」と一緒になって問いた算数の宿題をカバンの中にしまった。

目を伏せた彼女の横顔は、どこかぞっとするような色香を感じて、男は一瞬目を見張った。

彼の上司からは彼女の詳細は聞いていない。

彼女が何者であるのか。
彼女が何歳であるのか。
国家機密と目される彼女自身。

アメリカ合衆国はなにを隠蔽しようとしているのか。

「君はいつたい何者なんだ」

「そのうち、ジョージにわたしの資料でも見せてもらいなさいな」

何者だと言った彼に、彼女は唇に人差し指を当ててほえんだ。

いつか、いやでも捜査官のひとりとして知らなければならない。
付け加えて、アリッサは微笑した。

「わたしなんてその程度の存在でしかない」

たたん、たたん……。
列車が走る音が響く。

駅の壁を背中にして、少女はカバンを両手に抱えてため息をついた。

彼女の前にはドイツ製の高級車が停まっている。

ブーツと、ウールのコート。

グレーのコートにはフードがついており、ブロンドの巻き毛は無造作に三つ編みにされている。

黒い革製のカバンはバンドで背中に背負っていた。

リボンの付いたカチューシャをつけているその姿は、どこにもいるアメリカの小学生だ。

「久しぶりだね」

男の声に彼女は駅の壁に無言のまま寄りかかると、前髪をかきあげる。

ややしてから彼女は視線を遠くに投げかけたままで口を開いた。

「……ひとり？」

「君と会うときはいつもひとりだ」

柔らかな男の声色を聞いていたアリッサは忌々しげに眉をしかめてから舌打ちする。

灰色の髪と青い瞳の六フィート半はあろうかという長身の所有者は、中年の狙撃手だ。

「レディらしくないな」

「……レディなんかじゃないわ」

「……アリサ」

「あんな回りくどい方法で人を呼び出しておいて、あんたが何の用もなく、久しぶりって言いに来たわけじゃないんでしょ」

人を使って自分を呼び出しておいて、何の用事もないということはないだろう。

「レオナルドが捕まったらしい」

男の名前はジョージ・リートと言う。

殺人鬼とも呼ばれたアリッサとアメリカ政府を個人的につなぐパイプ役でもある。

セリオやレオナルドがアリッサと裏社会をつないでいるとすれば、ジョージ・リートはアリッサと公的な機関をつないでいる。

「……ふーん」

あまり興味もなさそうに相づちをうつた彼女は、視線を地面に落としてから考え込む素振りを見せた。

「そんなつまらないことを言いにきたの？」

問いかける少女の声は真剣だ。

「放っておけば勝手に帰ってくるわよ。それとも、わたしが介入しないといけないほどやばい相手だって言うの？」

アリッサの感情を感じさせない声に、ジョージ・リートは長いため息を吐き出した。

彼女をたばかることなどジョージ・リートにもできはしない。

「降参だ」

男の声に、少女が目線を車内に戻した。

「……最初からとつと白状してればいいのよ」

「黒幕はイーサーらしい」

「イーサー……？」

イーサーという言葉に、彼女の瞳が曇る。

「そう」

「本当に、イーサーが黒幕なのかしら」

思いに沈むこむようにアリッサが独白すると、再び地面を見つめて何事か考え込んだ。

「……イーサーはろくでもない男だけど、レオンとは比較にならないほど格上だわ」

そんなレオナルドにイーサーが興味を持つとは思えないのだ。

おそらく、イーサーがひよつこの裏社会に興味を持つとすれば、アリッサに関わりがあることだけだろう。

「知っているのか？」

「何度か仕事を依頼されたことがあるだけよ」

少女はちろりと男に眼差しを向けた。

優しげな顔立ちの男は、それなりに女性陣から人気があることをアリッサは知っているが、少女にとっては割とどうでも良いことだった。

「なるほど、仕事絡みか」

相づちをうつジョージの仕草に、アリッサは顎に指を当てて考え込む。

「どちらにしても、イーサーがレオナルドを、ねえ……」

「連絡先くらい知っているんだらう？」

「知らないわ。家は知ってるけど」

少女に依頼を仕様とする人間が、彼女の連絡先を知っていたとしてもその逆はない。

彼女の腕をひいて車の助手席に引き込んだジョージは、エンジンをかける。

「ジョージ」

「……うん？」

「どこに行くの？」

「ホテル？」

短いやりとりにアリッサは小さな拳を振り上げた。

「殺すわよ」

「冗談だよ」

殺す、という物騒な物言いに苦笑した中年男はアリッサの金色の頭を抱き寄せてキスをした。

父親と娘、という間柄にしては年齢が離れすぎている。
しかし祖父と孫娘という間柄でもない。

どこか恋愛関係に近いような、保護と庇護による相互関係でもあるかのような。

「少し寝るわ。ついたら起こして」

「了解した」

目を閉じた彼女に男は肩のホルスターの拳銃を指先で確認する。
彼女と出会ってどれくらいになるだろう。

ぼろぼろの実験服を着た子供があてもなくさまよっていたことだけを覚えている。

「……アリッサ」

今の彼女の名前。

彼女は何度となく名前を変えた。

眠る彼女は男が三つ編みをほどもなんの反応すら見せない。
無二の信頼に息を吐き出した。

「アリサ……」

子供のままの姿の愛らしいアリッサ。
信頼が重い。

「……愛していると言ったら君はどんな顔をするだろうね」

いつか共に行動するようになった異端の犯罪者。
彼女の金髪に口づけてから、男は鼻を鳴らして灰色の髪をかきまわした。

自分が捜査官で、彼女が犯罪者でなければもっと違う道があったのかもしれない。

そこまで考えて、ジョージは笑った。

どちらにしたところで、アリッサがアリッサである以上はどんなことがあるうと甘い関係など望むべくもなかったのだから。
どこまで愚かしいのだろうか、彼は笑った。

犯罪者のアリッサと、捜査官のジョージ。
少女のアリッサと、中年のジョージ。

彼らを隔てる溝は深く、広い。

決してそれは埋まらない。

ジョージは自嘲するように口元だけで笑った。

どれだけの時間がたってからか、ジョージは隣で眠るアリッサの肩を揺すった。

彼の前で少女は自分を偽ることをしない。

到着したのはホテルの一室だった。

満ちるのは静寂。

「つれてきたぞ」

大男の背後からゆつくりと入ってきたのは小さな子供。

巻き毛のブロンドの、第一次成長期の始まる前のしなやかな子鹿のような少女。

室内にいる誰もが自分の目を疑った。

もちろん、彼女を知る者がいて、彼女が知る捜査官もいる。

ぐるりとアリッサは室内を見渡した

「このわたしに、いったい何の用？」

あいているソファに腰を下ろした少女は、背中をもたれると体がソファに沈み込むため彼女は背筋を正す。

室内にいるのは四人。

ジョージを含めて五人。

今回の呼び出しにはレオナルドとイーサーが絡んでいることから国内の事件ではない。

イーサーは名前の通り、アジア出身でアジア在住の男だ。

「物騒なもんね」

揶揄するような高い子供の声。

ジョージは当たり前のように、アリッサの隣へと座る。

それについてなにか言おうとしたようだが、結局、何も言わずに彼女は口を閉ざした。

かすかに笑いをにじませたアリッサの声に、ジョージは少女の肩を軽く押さえた。

「全員が見事に拳銃携帯でさ。わたしがそんなに怖い？」

くすくすと耳障りな笑い声が響く。

「別に君が怖いから銃を持っているわけではない」

不愉快げに告げた男のひとりが、それでもなお訝しげな眼差しで少女を見つめている。

本当にこの小さな子供が伝説の殺人鬼なのかと。

伝説の殺人鬼。

彼女の本名は誰も知らない。もしかしたら、彼女自身も知らないのかもしれない。

「通り名は、マジックボム」

君の名前だ。

十数年前に全世界を恐怖に陥れた殺人鬼。

しかしマジックボムのターゲットは無差別ではなかった。

彼女は狙った相手だけを殺した。

「わたしが誰を殺そうと、あんたたちには関係ないでしょ？」

「だからって、殺していいわけじゃないだろう」

ジョージがたしなめるが、アリッサは軽く大男をにらみつけてからパチンと指を鳴らした。

「ジョージはいつもそればかり」

説教臭い男は嫌いよ。

吐き捨てた彼女の軽さに、別の捜査官が不意に激昂する。

「何人死んだと思ってるんだ！ 貴様のターゲットじゃない人間も大勢死んだ！ 警官も、消防士も、民間人も…っ！」

怒号にアリッサはうんざりと天井に目を上げた。

「やめてよ、あんたたちわたしに説教をするつもりで呼んだの？ それとも協力させるために呼んだの？ どっちなの？」

説教も、なにもかもうんざりだった。

間隙をつくような一瞬の沈黙に、アリッサは言葉を滑り込ませる。

残酷な、暗闇を。

「死ぬ奴は死ぬのよ。遅かれ早かれ、ね…」

その一言はぞっとするほど、深く、暗い。

「……アリッサ、正直なところどう思う？」

ジョージに促されて少女は立ち上がる。

ゆっくりと室内を歩いて、彼女は窓辺のカーテンに触れた。

「そうね、イーサーは尻軽だけどアメリカを敵に回すほど馬鹿じゃない」

彼女はごく淡々と告げて、男達を見渡した。

「なにか引つかかるのよね。レオンは確かにひよつこだけど、命がかかっている状況で失敗するほどアホじゃない」

独り言のようにつぶやきながら親指の爪をかんたアリッサは床を見つめて考え込む。

頭の中で鳴り響くのは警鐘だ。

「君に協力してもらいたい」

もっとも年長だと思われる男が初めて口を開いた。目の前の男を、アリッサはよく知っていた。

鋭い眼差しがアリッサを凝視する。

その剣のように鋭い視線を受け止めて、少女は唇の端をつり上げる。

「……銃持って、威嚇しながら言う台詞じゃないと思うけど？」

「君に銃など無意味だろう」

拒否権はないのだとでも言いたげな男の言葉に、娘は失笑した。

「協力してもいいけど」

アリッサは肩をすくめる。

「君につけこむようで悪いね」

男の言葉に彼女は左手で片目を覆った。

目の前の男、バート・レインとアリッサとの腐れ縁も長かった。

彼女には別の世界が見えているのではないかと、男たちは思う。

おもむろに銃を取り出した最年長の男は無言で撃鉄をおろした。まっすぐに銃口をアリッサに向ける男は片手で軽々と引き金を引いた。

至近距離からの射撃を、引き留める間もなかった。

「レイン！ やめっ……！」

ジョージの制止すら遅かった。間に合わなかった。

右手の指を差しだしたアリッサは小さく息を吸った。時間が止まる。

実際に時間が止まったわけではない。

時間が止まったように見えただけだ。

彼女の眼前でぴたりと止まった弾丸が真っ赤に発火する。

「こんなもので、わたしを試せるとでも……？」

小さな手で発火した弾丸を握りしめたアリッサを中心に風が舞った。

「もちろん、思っていないさ」

勘が鈍っていないかと思っ

「帰る」

言い捨てて出て行くアリッサが手を開くと、砕けた鉛がぱらぱらと床に落ちた。

赤い鉛の塊が、上質の絨毯を焦がす。

「彼女を試すようなことはしないという約束だったじゃないか……！」

レインと呼ばれた男にくっついてかかるジョージを尻目に、アリッサの声が飛んだ。

「ジョージ！」

帰りたいのだと、その言葉が言外に告げていた。

「一緒に行くといい、君はお姫様の聖なる騎士だ」
ブロンドがふわりと宙に浮かぶ。彼女の周囲が一瞬、赤色に染まったように見えたのは気のせいだったのだろうか。

華奢で小さな後ろ姿が怒りを孕んでいた。

「アリサ、なにを怒ってるんだ？」

「……怒ってなんかいないわ」

呆れているだけよ。

彼女は吐き捨てると、地下駐車場へと向かっていった。

かつて、世界を恐慌に陥れた殺人鬼、マジックボム。

世界を股に掛けた連続殺人事件があつたのはすでに十数年以上も前にさかのぼる。事件は「犯人」と目されていたマジックボムが最後に手に染めたたろう南アフリカでの殺人を機に、ぱったりと鎮静化した。

犯罪ジャーナリストたちの弁によれば、マジックボムがターゲットとなるべき人間を殺し尽くしたのではないか、と噂された。

もつとも、世間的には、あくまでも真実は闇の中である。

事件が鎮静化してしばらくたってから、マスメディアの世界でまことしやかに噂されるようになった話題があつた。

それは、「世界の警察」であるアメリカ合衆国がマジックボムと政治的な取引をしたのではないか、というものだった。

もちろん、マジックボムの正体はマスメディアの人間にも一般の人間たちにも知らされてはいないから、「マジックボム」の本当の姿を知る者は、事件当時、犯人を追いかけていた警察官だけだった。

一部のマスコミの人間たちは、マジックボムの正体に近づいたとされたが、ことごとく闇から闇へと抹殺されたとも言つ。

それ行つたのが、裏社会と呼ばれる犯罪者によるものなのか、それともアメリカ政府によるものであるのか、もしくは本人によるものであるのか、今をもつてしてわからない。

マジックボム、と言われる殺人鬼の周りでなにが起こっていたのか、それを知る者は光の世界に住む人間にはいない。

マジックボムには信奉者の存在があった。

誰かが、犯罪者の彼女を世間の目から守っている。

「……彼女。マジックボムを追おうとしているらしいという情報があります。ご存じですか？」

日本国。

その首都である、東京都の片隅。

霞ヶ関と呼ばれる地域にあるビルで、がっしりとした体つきの青年がつぶやいた。

「彼女、を……？」

控えめな若い娘の声が響く。

彼女の声の響きから、青年の告げた情報を娘が知らないことを暗に伝えた。

「あなたは、どう思われますか？」

「もちろんわたしはあの人を追うべきではないと、考えます。危険すぎますわ」

青年の年齢は三十歳をすぎたばかりだろう。

「国際手配をかけた、ということになるのでしょうか？」

青年に向かって二十代初めか十代後半といったところだろう女が長い黒髪を揺らして首を傾けた。

品の良い着物を着た女は、指先で紺色の袴を払った。

「そつだと思います」

どこか物憂げな彼の声に、娘はそつと片目を細めて見せた。

「……危険なことだと思います。もしかしたら、最も危険なものを呼び込むことになるのかもしれないというのに」

言いながら青年の瞳が思案に暮れる。

じつと東京の景観を見つめている彼の両目に危惧が浮かんだ。

「手配をかけた人たちは、それを知っているんでしょうか」

「あなたはとも心配性ですけれど、どちらの心配をしていらっしゃるの？ 我々の心配？ それとも彼女の心配？」

尋ねられて、青年は目を伏せる。

追う者の心配をしているのか、それとも、追われる者の心配をしているのか、と問いかける。

「意地悪な質問ですね」

青年の言葉に対して口紅をひいた唇を、指先でたどってから若い女は静かに微笑する。

「浮き雲……」

男に呼ばれて、娘はそつと片目を細める。

「彼女は高位者です。わたしたちにしても、彼らにしても高位者にあたる者を手のひらの上で転がすなどできるわけもない。わたしが心配しているのは、もちろん追う側の心配です」

そつ。

かつて、ケース・アングリーボマーと呼ばれた事件に際して、「

マジックボムの標的になった人間」だけではない。

多くの犠牲者が出た。

それらを反芻する。

警備員、消防士、救急隊員、そして自衛官や警察官。彼らは職務上の使命感から命を落とした。

それだけではない。

全くの無関係な一般庶民も死んだのだ。

彼女の前に立ちふさがったという、ひどくシンプルな理由だけで。

悲惨な事件だった。

思い起こすように、片目を押さえて考え込んでしまった青年に、娘は忍び笑う。

「わかっています。意地悪な質問をしてしまっでごめんなさいね」
年下の少年をたしなめるように告げる娘は、そつと窓ガラスに手をついて東京の街を見下ろす。

「相馬」

呼ばれて青年は和服姿の娘に視線をおろした。

「相馬、あなたのことを、マリアがとても心配しています。だから、どうか無理だけはなさらないでくださいましね」

「はい、ありがとうございます」

ぺこりと娘に対して頭を下げた男は礼を述べた。

それにしても、自分のことを知っている浮き雲はとにかくとして、

マリアが知っているということなのはどういうことなのだろうか、と相馬は考える。

相馬もマリアのことを知らないわけではないのだが、今まで「現実的」に接点があるわけではない。

「それでは、わたくしはこれで失礼いたします」

にこりと彼女、浮き雲が笑った。

袴を揺らして歩き去っていく彼女の華奢な後ろ姿を認めてから、相馬は首を傾げた。

「もっとも、そんなわたしも相当なイレギュラーか……」

そうつぶやいて苦笑した彼は、廊下の向こう側から若い女性の叫ぶ声が聞こえる。

「相馬さん、パトロール行きますよー」

「わかりました、すぐ行きます」

大きく手を振っている制服姿の若い婦警に応じながら、音もなく踵を返した。

*

黙り込んだアリッサはむっとり車の窓の外を見つめている。流れていく風景と、風に巻き上がるブロンドにジョージは片目をすくめた。

その横顔は幼さを感じさせない。

まるで陶器細工の人形のようにも見える。どこか人形めいた彼女の横顔に、視線だけを滑らせてジョージ・リートは思った。

今は、声をかけてはいけない。

彼女は思考の谷間にある。

「……イーサー、がねえ」

つぶやいた彼女は、やはり黙り込んだ。

イーサーという名前をジョージは知っていた。

ユーラシア大陸、北緯三五度、東経五一度に位置するイラン。その国境は六カ国に接している。

一九八〇年に隣国のイラクの侵攻によってイラン・イラク戦争が勃発し、この戦争は一九八八年まで継続していたのは記憶に新しい。その首都はカスピ海により近いテヘラン。そこに居を構える武器証人が、イーサーだった。

もっとも、武器証人とは言ってもイランではそれなりに政府との太いパイプを持つ上流階級の人間で、その影響力はアジアのみならず全世界にわたるとも噂される。

「イーサーというのは、本名なのか？」

「本名なわけではないでしょ」

ジョージに尋ねられて、一蹴したアリッサは夜のとばりに包まれた街並みを見つめながらアリッサは睫毛を揺らす。

「イーサーの本名は、イランでも知ってる人間なんて片手で数えるくらいしかないんじゃない？」

なんでもないことのように少女が言う。

全世界に影響力を持つイーサーも、アリッサにかかれば「イーサーなんて」程度の扱いでしかない。

彼女にとつては、まさしくどうでもいいことなのだろう。

「君はどう思ってるんだ？」

質問を投げかけられて、アリッサは肩をすくめた。

「どうでもいいわ。知りたくもないし、知りたいとも思わない」

切り捨てるような彼女の物言いに、ジョージは「ふむ」と相づちを打った。

「イーサーが気にならないのか？」

「……全然。だって大嫌いだもの」

独白するように彼女が淡々とぼやく。

ぞんざいにつぶやいたアリッサに、ジョージは片方の眉毛をあげた。

「イーサーに、会ったことある？」

しばらくしてからアリッサがぼつりと尋ねる。

「俺はイランに何の伝手もないからな、あるわけないだろう？」

ジョージは国外の事件に携わる捜査官でもなければ諜報員でもない。

「一度も？」

鼻を鳴らした少女は、右肘を車窓についてその手のひらに頬を乗

せた。

「あいつさ、変態で嫌い」

まるで彼を知っているような口ぶりにジョージはステアリングを操る手を止めないままなにか言いたげに唇だけをわずかに動かした。

「……？」

「何度かあいつから依頼を受けたことがあるって言ったじゃない？
自分じゃなんにもできないくせに、権力があると心の底から信じている愚か者」

自分ではなにもできない、と、ぞんざいに彼女は言い放つ。そんなアリッサを横目で見やって、ジョージはかすかに首を傾ぐ。
少女の声が侮蔑をはらんだ。

「だから嫌いなのか？」

「馬鹿なのよ、あいつ」

鼻から息を抜いた彼女は両目の上で指を組んだ。冷たいアリッサの声は冷ややかに響く。

「イーサーから依頼されてなにをしたんだ？」

「ジョージはすぐ怒るから言いたくない」

無然とした彼女の面持ちに、ジョージは苦笑した。

そんな彼女を彼はかわいらしいと思う。

実際、アリッサはその辺の女兒とは比べるまでもない美少女なのではあるが、ごく一般的な成人男性が美少女とは言え、女兒に好意を持つものなのかと問われたとしたならばそうではない。

彼女に好意を寄せる者たちはそれなりに存在するが、彼ら全てが彼女の容貌以外の部分に強くひきつけられたといっても過言ではないだろう。

アリッサに向けられる感情は、畏怖であり感嘆。

誰も、彼女が裏社会の高位者であることを否定することなどできはしない。

政府の依頼を受けると同時に、彼女は裏社会のひとりとして彼女は多くの仕事をこなしてきた。

「昔のことだ、今さら怒ったりはしないさ」

昔の事件。

それに対して今さら何かを言ったところで過去は変えられない。

「……本当に？」

まるで探るように彼女は、ジョージに問いかけた。

「約束する」

視線を滑らせた彼女はしばらく考え込んでから肩をすくめた。大柄なジョージを見やる。まともに組み合ったらアリッサなど抵抗すらできないだろう。しかし、それでもアリッサは、圧倒的にジョージよりも優位にあった。

彼も彼女も、同様にそれを認識している。

「あいつの依頼で、メキシコにある麻薬組織を三つほどぶっ飛ばした。報酬はそれぞれ十億ドル。報酬は破格で成功報酬。依頼は成功

してわたしは三十億ドルを手に入れた……」
三十億ドルという金額は普通ではない。

もつとも、それを元手にして彼女は他の傭兵を雇ったり、情報を入手したりしているわけだからアリッサが大金を持っていることはなんらおかしいことではないのだ。

彼女の金銭感覚は少々おかしいところもあるが、日常生活では贅沢をするような性格でもない。

もっぱら彼女の普段の出費は些細な家賃と光熱費などだけだ。
元々、アリッサが自分の身の回りのことに対して、あまり頓着しない性格もあつただろう。

アリッサの身につけている衣服は彼女が買った物ではなく、ほとんどジョージら、彼女の理解者が買い与えたものだ。

もつとも、一見ただけでは幼女でしかない彼女がひとりで買い物などできるわけもないのだ。

「三十億ドルか……、俺が一生かかっても稼げそうにないな」
苦笑したジョージをアリッサは無表情にちらりと眺める。

「あたりまえでしょ。そんな稼ぎ方できるのはこの世でわたしだけよ」

彼女は自分の体を担保にして莫大な金額を手に行っている。

アリッサは言わないし、ジョージは彼女の財産を聞いたこともないから彼は知ることはないが、おそらく想像すると彼女の持つ財産は三十億ドルを有に越える。

世界中に隠れ家としていくつもの家を持ち、そして多くの武器を

所有する。

一説によれば、彼女は戦車を持っているのではないかと、航空機を何機か持っているのではないとも言われている。

そんな末恐ろしい噂を聞いてしまうと、もしかしたら船や自動車、そして潜水艦なども持っているのではないかという想像すらしてしまう。しかし、普段の彼女は身軽に動くためにほとんどの私物を持つてはいない。

彼女の数知れない財産を管理するのは第三者であるというのがもっぱらの噂だった。

「最後に会ったとき、あいつなにをしたと思う？」

不穏な言葉にジョージは思わず路肩に車を止めた。

「なにをされた……？」

低くうめくように彼は問いかける。

強い力で少女の細い肩をつかんだ。

痛いほど込められた力に、アリッサの顔が歪む。

「痛いってば……」

「なにをされたんだ！」

切羽詰まった男の声に彼女は動揺する。

彼の動揺した姿などアリッサは見たことがなかった。幾度か危険にさらされたときにも動揺したことがあったような気がするが、今のジョージのそれは以前の反応とは全く違った。

「わたしがアルコール飲めないの知ってて、ジュースだしてくれた

んだけど、薬盛られて……」

もちろん、彼女は飲まなかったが。
彼女の瞳に嫌悪の光がひらめいた。

「レイプされたのか……？」

「違う。されかけたけど、半殺しにしたわ」

至極冷静に。

彼女は告げる。

ほっとため息をついたジョージは、強い力はそのままに少女の背中と頭を抱え込むように抱きしめた。

「……なんと言わなかった」

かすれた声でジョージが彼女に告げる。

「言ったところでどうなるわけでもないでしょ。それに、あいつはわたしが半殺しにした」

だから終わったことなのだと、彼女はあっさりと言った。

「君が無事で良かった」

「変な奴」

アリッサはため息混じりに言いながら、男の頬を両手で包み込んだ。
だ。

「わたしのことが心配？」

「……心配だ」

ジョージは彼女が子供のときから見守ってきた。
庇護してきた。

誰よりも大切な娘であり、大切な妹のような。

「心配でたまらない。君が仕事しているときも、政府の依頼をこなしているときも、いつも……」

できれば、いつもついていてやりたいとすら思う。

しかし、年齢には勝てない。彼女はいつか、彼の手の元から離れて、若い世代の兵士や傭兵たちと活動を共にする用になった。

それは、戦争屋のひとりとしては、ごく当たり前の判断だ。

とつさに柔軟に動けないようであれば命に関わる。

自分自身の命だけではなく、なによりもアリッサを危険に晒す。

「とりあえず、離してちょうだい」

彼女は大男の胸を押し返してから、大きな水色の瞳でジョージを見つめた。

「あいつは……。イーサーは変態だけどアメリカを敵に回そうだななんて思っていない」

そこまで告げてから車を降りた。

そして振り返りもせずに歩き出す。

車内には彼女の登校用のカバンだけが取り残されていた。

要するに、休学届けをしておけ、という命令だ。

「……アリサー！」

早足の後ろ姿にジョージは叫ぶ。

「いい？ わたしはイランに行く。ひとりで充分だからついてこないで」

振り返って唇だけが告げる。

ふわりと舞い上がった金髪が赤い光が彼女を包み込んだ。

異端の証拠。

アリッサはタクシーをひろうとどこかへ消え去った。

もつとも、ジョージにはどこに行ったのかと言うことはおかたの検討がついていたが、それを追求することは彼女を信頼しないということになる。

彼女には彼女なりのコネクションがあったのだから。

少なくとも、政府に協力することはあっても、政府の犬ではない。

一匹狼だった。

それ故に、伝説の殺人鬼。

同じ頃、イランの首都テヘランの郊外にある屋敷の片隅で、男がひげを指でなでた。

「マジックボムがでてきたか」

黒髪の、ひげを蓄えたアラブ人男性は困惑したように苦笑する。顔面の一部に火傷を負ったその男は、愛しげに火傷の痕をたどってから部下の男達を見渡す。

「レオナルドとかいう男のことを知っているか？」

ボスの問いかけに、部下達は一様にかぶりを振りながら口々に首をかしげた。

「知りませんね」

「ひよつこだろう」

イーサーはテーブルの片隅に置かれた小さな写真立てを見つめてから優しげにほほえんだ。

彼も今回の事件を少なからず把握している。

自分の名前がアメリカで出たという異様な事態。

おかしい、と彼は思った。

「彼女はこちら側の存在だ。へまはしない」

「……ボス？」

明るく笑う少女。

ブロンドの巻き毛の。

しかしその笑顔が向けられていたのはイーサーではなかった。相手の名前を呼んで、駆け寄ろうとしたその瞬間の写真だ。

「おそらく彼女はここへ来る。わたしが嫌いでも、な……」

そう告げて、イーサーは珍しくにつこりとほほえんだ。

真実を探しに彼女は彼の目の前にくるはずだった。

わかりきっていた事実。

アリッサが一級の犯罪者である以上、イーサーと決別することは困難である。

彼が彼女から決別することができないように。

彼が死ぬか、彼女が死ぬまでその相互関係は決して切れることはない。

もつとも、彼女はわざわざ仕事の依頼を受けなくても生涯生きていけるだけの金銭はあつたはずだが、好戦的なのは生来の性格なのか困難な状況の依頼ほど好んで受ける傾向にある。

組織だつて行動する傭兵とはまた異なる位置にあるアリッサ。

普通の戦争屋と彼女が異なるのは、彼女自身の特異性にあつたのだが、それでも裏側の人間たちを動かすには莫大な金銭が必要だつた。

だからこそ彼女への依頼は通常の裏社会の者たちに依頼をするよりも高かついた。

イーサーも、もちろん彼女の特異性を理解している。

彼女は特別だ。

「あの子は、良い子なんだよ」

裏社会にあつてあの容姿であるためか、そもそもまた別の理由からか。

薄汚れた世界で生きる大人たちから見れば彼女の潔癖さと、純粋さはまぶしく感じられるほどだ。

だからこそ、誰もが惹かれる。

その強靱さも相まって。

強さを求める男たちは、彼女の揺るぎのない強さに惹きつけられた。

圧倒的な存在感と威圧感を持つて彼女はそこにいる。

「良い子すぎて、彼女はこの世界には似合わないね」

イーサーは誰ともなくつぶやいて苦笑した。

見目麗しい少女の中に存在するもの。

彼女の内側にあるのは激しすぎる怒り。

幼いゆえに自分の怒りをどうすることもできずにその感情をもてあます。

くつくつと笑ったイーサーはそうして目を閉じた。

その世界に生きる男たちは知っていた。

マジックボムと呼ばれる犯罪者。今の名前をアリッサ・ノースウ
ッド。

彼女は、最強であると。

場所はワシントンD・Cの外れにある小さな飛行場だ。

そんなところで営業していて法的に問題がないわけではないのだが、一応の登録としては個人所有の飛行場ということになっている。

もちろんアリッサの所有しているものではない。

この飛行場に出資しているのが、アラブ諸国の親米派の富豪らしい、という噂だったが飛行場に訪れたことはない。そして、その管理運営を任されているのが空軍出身の元メカニックで偏屈爺さんとして名が知れているケーシー・スプリングである。

国の経営する大空港のように最新の設備が整っているわけではないが、空港としては充分機能するだけの設備投資がされている。

そんな個人空港の片隅に、アリッサの持つ機体があった。

「相変わらず、ごついよなあ。女の子の持ち物とは思えないね……」

「相変わらずごついもの」と表現されたのは、古い型ではあるが小型の輸送機だった。あきれたような声を放ったのは、がっしりとした体躯の男で、そんな彼をちらりと見上げて、そのスネを思い切り蹴り飛ばす。

確かに、少女の持ち物とは言い難い。

そもそも、持ち主が子供だとか成人者であるかという論議以前に、個人で持っているものではないだろう。

「……いつ！」

低く悲鳴を上げた男に、少女は表情を変えずに金色の巻き毛をく
るりと手慣れた仕草でまとめるとピンで留める。

どうやらなにかが気に入らなかった様子だ。

もっぱら彼女が人を雇う原因というのがそもそもこれで、アリッ
サは体格のこともあるって、通常、大人の傭兵たちが難なくこなすこ
とが彼女にとってはひどく難しい。

知識はあるが、それとこれとは問題の次元が違う。

「痛つてえー……」

「こんなもん大したもんじゃないでしょ。傭兵なら誰だって持つて
るわ」

吐き捨てるような彼女の言葉に、男は思わず頭を抱える。

誰でも持っている、というわけでもないがそれほど珍しいもので
もない、と思っているのは発言した本人だけだ。

「自分で操縦できもしないもん買う必要ないだろうが」

「……別にわたしが運転できなくても持つてないとなにかと不便で
しょ」

言い捨てながら彼女は輸送機の前を歩き去っていく。アリッサは
こついった側面に対して無頓着と言つか、世間知らずな一面をのぞ
かせた。

今回は、その輸送機に出番はない。

彼女が足を止めたのは、旅客機の前だ。

アメリカ合衆国、首都ワシントンD・Cからイランまでフライトするわけだから、小型の輸送機などで行くわけにも行かない。

小型の旅客機は彼女がごく限定的な目的のために使用する。小型とは言え、防弾仕様の頑丈な改造を成されたそれはアリッサが仕事をするために使われる。

「メンテナンスはすんでいるからいつでも飛べる」

髪のすっかり白くなった白人の男、スプリングにそう言われて、アリッサは見慣れた機体を見上げる。

「イランに行くと聞いたが、パイロットは必要かね？」

パイプを吹かしながら尋ねる彼に、少女は「そうね」と言いながら考え込む。

「貸してくれるならありがたいけど」

「片道五十万ドルでどうだね？」

にやりと老人が笑う。

「契約成立ね」

アリッサはなんでもなしのように言いながら軽くかぶりを振った。

「そちらの仕事がすんだら振り込んでくれればかまわない」

彼も彼女も裏社会のトップクラスだ。

約束は反故にしない。

「わかったわ」

いつになるかわからないけどね。

付け足した彼女に、初老の男は闊達に笑った。

アメリカ国内で、彼女の航空機を管理するメカニックのひとりで、彼の下には数人のパイロットがいる。

いずれも平凡な世界では生きていくことができない曲者揃いで、当たり前なことだがそれなりの修羅場をくぐり抜けた軍隊出身のパイロットたちは荒事には慣れていた。

そんな男たちでなければアリッサの仕事に同行することなどできない。
しない。

「おい、ライアン。姫様と一緒にイランに行ってくれ」

「姫様つつと、爆弾魔の姫様か？ おやっさん」

ぞんざいな言葉遣いの三十代後半の男の姿を認めて、アリッサは目を細めた。

彼とも長いつきあいになる。

もっとも、未だに彼女は「ライアン」の本名を知らなかった。

彼らとつきあいのある女性傭兵で、航空機持ちなどアリッサ以外にいない。だから、彼らには「姫様」という単語だけで誰であるのか理解できる。

「それで、どうするんだ？ 帰りは？」

彼は何度か彼女とミッションをこなしているため、アリッサの行動には想像がつく。

「帰りは飛行機運転して帰ってくれて構わないわ。自分たちの帰りはなんとかするから」

まるで彼女の口振りは近所のスーパーマーケットへ「ちょっとそこまで」とでも言っているかのようだ。

「了解」

身軽な足取りで歩く彼は、小さく口笛を鳴らした。

彼は元々、アメリカ空軍の腕の良い戦闘機乗りだったのだが、単独行動を好む一匹狼であったことから、軍での作戦がいやになって機会を見つけて退役したといういきさつがある。

気分屋ではあるが、その腕は確かでありリッサが信頼しているパイロットのひとりだった。

アリッサがごく平凡な妙齡の女性であれば、それなりに面倒な事態に巻き込まれることになるのだろうが、いかんせん、小児性愛者には厳しいアメリカ合衆国のことだ。彼女がいかに美少女であっても、性欲の対象にはならず、今に至る。さらに彼女の戦闘能力は桁違いで、熟練兵たちすらも手玉に取るだけの實力を持っているため、アリッサは荒くれ者たちとは、どこか不可思議な共闘関係を維持している。

「……あなたがフツの女だったら、言い寄る男も多いんじゃないのか？」

アリッサよりもずっと高い位置でたばこを吹かしている男を見や
つて、少女は顔色一つ変えずに金色の髪を耳にかきあげた。

「もしも、なんて仮定は無意味だって、あんだだってわかってんでしょ」

感情のこもっていない彼女の声色。

「ライアンは煙を吐き出しながら笑った。
「そうだな……」

歴史の流れだけではない。

「もしも、わたしが普通の女だったら……」

アリッサはまるで思いを馳せるようにつぶやいた。
そもそも、「普通」とは。「平凡」であるとはどういうことだろう。

少女は思う。

眉間をよせた彼女は、ふと、後頭部に鈍器で殴られたような痛みを感じて頭を押さえた。

「……アリサ？」

鈍い痛み体に丸める。

見知った傭兵の声に、少女は視線をあげた。

「大丈夫か？」

「なんでもないわ」

コックピットに入ろうとしていたライアンも異様な雰囲気振り返る。

がんと殴られるような痛み少女は眉をひそめた。

「なんでもないって様子じゃないだろう？ そんなんで大丈夫なのか……？」

男に告げられて、アリッサは差し出された腕に爪を立てた。

「……うるさい」

黙れ、と彼女は言う。

「別にわたしは、イランに戦争を仕掛けにいくわけじゃないわ。こんなこと大したことじゃない」

低く威嚇するような彼女の声に、傭兵の男は目が釘付けになった。アリッサとは、何度か戦場を共にしている。

普段のアリッサが感じさせない圧迫感。それは、度々戦場で放たれるものだ。

彼女が、彼女自身の中にあるなにかを守ろうとして牙を剥く。

「あんたは、わたしの言うことを聞いてればいいのよ」

詮索などする必要はない。

冷たく言い放たれた言葉に、男は気圧されたままで半歩後ずさった。

それこそが、彼女の放つ圧倒的な存在感。

痛むらしい後頭部を押さえて彼女は眉間を寄せたまま。そんな彼女の様子に、男は心配そうな瞳を向けたままで詰めた息を吐き出す。

「……大丈夫よ、たまにあることだから」

こんなことは大したことではない。よくあることだと言い聞かせるアリッサは男の腕を払いのけるようにして立ち上がった。呼吸を整えてからアリッサは強い眼差しを前方に向ける。

「大丈夫、心配しないで。こんなこと大したことじゃない」
まるで自分に言い聞かせるようにアリッサはつぶやくと、音もなく足を踏み出した。

背後に大男を従えて。

*

イランの首都、テヘラン。

西アジア、カスピ海の近くにある大都市だ。

テヘランの都市圏は世界大都市圏の上位二十位に入っている。その言語のほとんどがペルシア語を話す。標高が高いため、冬は長く寒さが厳しい。

その郊外に広い敷地を持つ屋敷に上ずった悲鳴が上がった。

時刻はもうすぐ夜の闇に夕日の色彩が沈んでしまいそうな時刻だ。すでに、街を支配しているのは夜の暗闇と言ってもいいだろう。

「広すぎる……」

アリッサの忌々しげな声が響いた。

彼女の足には広大なイーサーの邸宅は広すぎる。もともと、一般的な家と比べても相当に広い。

いかにも大金持ちの屋敷、といったところだ。

アリッサは、この広いイーサーの屋敷に忍び込もうとはせず、正面突破を選んだ。

「相変わらずの暴れっぷりだ」

感心したような男の声に、少女はきつい瞳で彼を睨み付ける。

「……………」

瞳を向けられて男はやれやれと肩をすくめると、サブマシンガンを持った肩を軽く回す。

爆発音が響いた。

少女の背後で首をすくめてから自分の隣で巻き上がる炎を見る。長身の男は灰色の瞳をまたたかせてから、太い腕をまくりあげた。

「アリサは人使い荒すぎる」

「客に無駄口たたいてんじゃないわよ、ジョス」

ぞんざいな彼女の言葉。

「金払ってんだから文句言わないで」

「使用人料、だよな」

確認するように、ジョスと呼ばれた男は首をかしげた。アリッサはとにかく人使いが荒い。

彼の名はジョスリンで、愛称をジョスと言った。

「あたりまえでしょ」

取り繕うということは一切しない彼女はきっぱりと言い放つ。

もちろん、重量のある武器なども扱うことはできないが、彼女はそれを自分にとって不利なことであるとは考えたことがないようだった。

彼女はスーパーマンではない。

一見すれば彼女は丸腰だ。

しかし、アリッサの恐ろしさを、彼女に幾度となく雇われた男は存分に知っていた。

この小さな子供が、敵として出会ったのではなくて良かったと思う。

「あんたが敵じゃなくて良かったよ、全く」

まっすぐ歩く彼女の周囲には火柱が立つ。

空間を引き裂くような轟音だ。

おお、怖い。

男は口の中でつぶやくと、短機関銃を構え直した。

「ま、久しぶりに、ぱーっと暴れるか」

「暴れられないかもしれないけどね」

彼女の前に立ちはだかるのは武装した男達だ。

銃を持った屈強な青年たち。

そんな男をじっとにらみ据えたまま、ゆっくりと歩いて行く。

彼女は全く怯まない。

サブマシンガンを構えた男に、アリッサは右手を開くようにしてさしのべた。手を空に向けて拳を作る。

その中の数人の顔をアリッサは知っている。

「イーサーのところに案内しなさい」

命令する。

すでに何人の兵士が死んでいるかわからないような状況だった。

しかし、イーサーにとって彼らはただの手駒のひとつでしかなく、アリッサにとっては今まで殺した複数の人間の中の複数でしかない。

「アリサ……！」

その声はジョスリンから放たれたものだった。同時に、ジョスリンの足が飛ぶ。

太く固い彼の足はアリッサを狙う銃に届いた。そのまま空を切つて重く蹴り上げる。

さらにジョスリンの突きだしたナイフがアリッサを狙う男の頭を貫いた。

肘で男の腹部をたたきつけて彼はアリッサの様子をうかがった。

しかしアリッサはそれすらも計算内だと言いたげで、男はもう一度肩をすくめた。

「さすがに女王様だね」

「舌抜いてやろうか？」

彼女の航空機をメンテナンスするスプリングを含めたパイロットたちは彼女を「姫様」などと茶化すが、実際、そんな風に呼ばれるほどかわいらしい存在ではない。

真顔で告げたアリッサの横顔にぞっとする。それは戦場で感じる恐怖とは全く別の恐怖だった。

強い眼差し。誰をも魅了してやまない瞳。

彼女は何でもできる。

彼女は誰でも殺せる。

「イーサーに会わせなさい。これ以上殺されなくなったらね」
どんな仕掛けなのか、彼女の周りでは確かに火の手が上がる。爆
発と轟音。

それが彼女がマジックボムと言われる所以だ。

激しい怒り。

彼女を突き動かしているのは激しすぎる怒りそのもの。アリッサ
を動かすのは、今も昔も変わらない。

ただ純粋な怒りだけが、彼女を支配している。

アリッサは明かりの付いたバルコニーを見上げて唇をかみしめる。
軽い頭痛がした。

頭痛などに意識をとらわれていると命取りになる。

アリッサはぎりぎり奥歯をかみしめてから、腕を振り上げた。

巨大な火柱が上がった。

その頭痛はアリッサがまだ子供の頃から断続的に続いているものだった。まだ、ジョージ・リートと知り合ったばかりの頃だっただろうか。

正確な日付は覚えていない。ただ、時系列から考えるとケース・アングリーボマーよりもずっと前だったはずだった。

ジョージ・リートとはケース・アングリーボマーよりも以前に知り合っているから、アリッサにとっては最も古いつきあいの男になる。

その当時から、彼女は時折、鈍器で殴られるような頭痛に襲われていた。

普通の人間であれば、病院を受診すればいいと考えるだろう。しかし、彼女はそうしない。

彼女にはそうできない。

なぜならば、彼女は医療機関に受診することなどではしないからだ。

意外なようだが、アリッサは社会保証番号を持っていない。

今では政府関係の機関によって定期検診を受けさせられるのだが、そんなことで彼女の頭痛の原因を探ることができるわけでもない。

「……っ」

後頭部を押さえた少女は襲いかかる男を、片手を背後にのばして受け流すと、その腕を軽く上下に振った。

音もなく燃え上がるのはただ、ひたすらに青い炎。

いかに最強の傭兵と呼ばれるアリッサでも多数を相手にして気を抜けば、待っているのは「死」そのものだ。

アリッサは最強だが、決して無敵でもなければ不死身でもない。

「……アリサ！」
ジョスリンの声が聞こえた。

*

少女は目を覚ました。

「……う」

ひどい頭痛がする。

まるで後頭部をなにかで殴られたかのような痛みに、少女は体を丸めた。

なにもかもうんざりだった。ずっと、そう思っていた。

「大丈夫か？ うなされていた」

いたわるような青年の手は大きくて硬い。

とっさに払いのけて、彼女はきつく目を閉じた。

「触らないで」

触るな。

わたしに、触れるな。

男の体温が不快だった。

「気持ち悪い……」

つぶやかれた彼女の言葉に青年が目ですがめる。
しかし、彼はなにも言わない。

「……人間なんて」

吐き捨てるような彼女の言葉は、割り込む余地などない。
「わたしが人間だなんて」

青年がその小さな肩に触れても、今度は払いのけたりはしなかった。

先ほどまで眠っていたというのに、なんという冷たさだろう。体温は完全に下がりきって冷たく感じるほどだ。

「人間ってなに？ ガーゴイルたちとあんたと、わたしとなにが違うの……？」

ガーゴイル。

初めて彼女の口から聞いた名前だった。

「ガーゴイル？」

「何が違うの……？」

彼女の言っていることがわからず、つかみかかる勢いの少女を、灰色の髪的青年が抱き留める。

「わたしはなに？ 人間ってなに？」

冷え切った少女の体に、青年はただ彼女を抱きしめるしかなくて言葉を探す。

少女は何を求めているのだろうか？

家族や、安心。

そんなものではないことはわかったが、それ以上のことはジョージには皆目見当がつかなかった。

それは、当時の彼の若さゆえだったのかもしれない。

灰にすすけた頬で、実験着と裸足のまま街をうろつく子供。

よくみれば傷だらけでほうっぺおいたなら、どこかの施設送りにされたかもしれない。

「君の名前は？」

「知らない……。ガーゴイルはそんなこと教えてくれなかった」

少女の言う「ガーゴイル」がなにを指しているのかわからず、
ジョージは首をかしげた。

ガーゴイルとは何者だろうか。

「落ち着いて」

柔らかく言葉をかけながら背中をさすってやってジョージは目を
伏せる。

切羽詰まった少女の眼差しに、どれほどの苦痛を味わったのかと
思いを馳せる。その苦痛を少女の年齢では言葉にすることなどでき
ないだろう、とジョージは思ったからだった。

「大丈夫、僕は君を傷つけたりしない」

彼女をなだめながら、しかしジョージは違和感を感じた。それは、
捜査官として精神病質者などに属する人間を相手にしているときの
その感覚だ。

かすかな違和感。

パチリ、と音が響く。

少女を抱きしめたまま彼は首を巡らせた。

音のする方向に視線を向けるとベッドの端に火がついていた。
炎の爆ぜる音。

呆然としたままジョージは少女を抱きしめる腕に力をこめる。

どうにかしなければならぬ、と頭では思うが、理解が追いつか
ない。

「離して。殺す……。殺してやる……。っ！ みんな殺すのよ……。！」

水色の瞳が狂気を宿してジョージを見つめる。

正気ではなかった。

長い時間をかけて少女の精神は腐食して、確実に病んでいた。

「みんな、殺せばいいの。ガーゴイルもみんな！」

歌うように高らかに叫んだ少女の周りで爆発が起こる。

金色の髪が炎の赤を映して、美しく輝いている。

見開いた目はなにも見ていない。

目の前にいるジョージすらも。

わけがわからないまま、ジョージは叫び返した。

「やめろ、僕は君を傷つけない……！」

傷つけたりはしない。

そう何度繰り返しただろう。

眠りから目を覚ました。

「永遠に君を守る……っ！」

叫んでから体を起こしたジョージの視界に最初に飛び込んできたのは灰色の天井。

炎にまかれた若い時代を思い出す。

「アリサ」

アリッサならば、殺されるようなへまはしないだろう。

わかっていた。

それでも、昔の夢を見たのは彼女がイーサーの話をしたからだろ
うか。

「どうか無事でいてくれ」

イヤな予感が拭えない。

親指と人差し指で目を押さえたジョージは長い時間息をついてから首の周りの圧迫感に苦く笑った。
ネクタイを締めたままで眠ったから余分な夢をみたのかもしれない。

*

足音がする。

それに重なるのは重いブーツの足音だ。
軽い足音とは真逆でその間隔は長い。
ゆったりと、軽い足音を追いかける。
ぱたぱたと走る足音を知っている。

想像のたやすい光景に、イーサーは静かに笑った。
「待っていたよ」
独白のようにささやいた。

樫材の扉が爆発音と同時に吹き飛んだ。舞い上がる炎と黒煙。吹き上がる風は炎によるものだ。
熱い煙が巻き上がる。

イーサーはその煙に苦笑した。

以前と変わらない美少女振りに口元をゆがめる。
彼女は彼を嫌っているからだから良い顔をするはずもなかったが、イーサーにとってはそんなことはあまり関係がないことだった。
イーサーとアリッサは、好きだとか嫌いだとか、そんな私的な感情でふたりの関係は切れることがない。
彼が初めて彼女を知った時、アリッサはまだ「アリッサ・ノースウッド」とは名乗っていなかった。イーサーはそんなことを思い出

す。

少女の声が彼を呼んだ。

「イーサー」

大きな水色の瞳が据わっている。

かなり怒っているらしい。

しかし、彼女はどのようにして怒っているのだろう。

いや、わからないわけではない。見当はつくものの、冷静沈着を旨とするアリッサがどうしてもこんなにも怒っているのだろう。

「姫、どうして怒っているんだい？」

イーサーはアリッサを姫と呼ぶ。

もっとも、彼女自身は真顔で「姫」と呼ぶこのイラン人の男のこ
とを好きではない。

そう言つと、見る見るうちに少女の目がつり上がった。

アリッサは相応に年を重ねているはずなのだが、彼女はごく普通
に年齢を重ねた者が誰でもできる腹芸を好まなかった。

アリッサは感情を隠すことが苦手だ。

それもそれで彼女の魅力だと、イーサーは思つのは欲目なのだろ
う。こんなにも表情豊かな、純粋な子供がいるかと言えば答えは「
ノー」だ。

アリッサのように知的で、表情が豊かな才能にあふれた裏社会の
女を彼は知らない。

そして、そんな理由だけでイーサーが彼女に惹かれるわけではな
い。

「腹芸は嫌いなよ……」

舌打ちして低くつぶやく。彼女は眉をひそめて言い放った。決して怒鳴るほど大きな声ではないが、その声音には人を圧倒するだけ

の迫力が秘められている。

たとえ、裏社会のトップクラスの間人と言えど、彼女に圧倒されずにいられる者などいない。往々にして裏社会のトップクラスは誰しも「そう」だった。

おそらく、ほかの裏社会に対してなにも思わないのはアリッサだけだ。

彼女の非常識とも言える感情の移ろいを理解できる人間などそう多くはない。

それほどまで、「マジックボム」とは人並みはずれている。

「……これは失礼した」

イーサーはかすかに片目をすかめながら言えば、アリッサはきつい瞳に光を閃かせたままで目の前のペルシア人の男を睨みつける。

「わたしは、あんたと遊びにきたわけじゃない。正直に吐かないと屋敷ごと吹き飛ばすわよ」

そこがイランという国であろうが、自分がアメリカに属しているうがそんなことは関係がない。

「これは物騒なことを言う」

アリッサの言葉に、髭面の男は苦笑した。

「わたしが、いつ姫をたばかったことがあったかね？」

泰然とした男の態度が少女の勘にさわる。

いつもこの男はこうだ、と少女は思った。

もちろん怒った顔もかわいい、などと、イーサーがのんきに考えていたわけではない。

少なくとも、殺人能力、という一点については彼女はその辺の殺人犯や傭兵たちとは質が異なる。イーサーが彼女に勝るものがあるとするれば、組織力と財力のみだ。殺人能力という意味で、アリッサに勝る殺人者など居はしない。

だからこそ彼女には弱みを握らせてはならない。

「この狸。あんた、レオナルドのことを知らないとは言わせないわよ」

アリッサが忌々しげに告げる。

確かに自分は彼女と比べれば、狸ではあると思うが、それはアリッサが不器用なだけだ。

決して自分が特殊なわけではない、と、イーサーは思う。

イーサーは、レオナルドのことを知っている。しかし、それは一般的な情報だけだ。

「レオナルド、か……。プロフィールでも言ってみせようか？」

淡々とした男の言葉に、アリッサはきつく片眉を跳ね上げる。そして、言葉を放ちながら大きな手を伸ばした男に、少女は勢いよくその手を振り払った。

「わたしにさわらないで……」

触るな。

自分の周りに存在する全てのものを、彼女は拒絶する。

「姫は何に、恐れを抱いているんだね？」

イーサーが静かに告げれば、少女は不快げに舌打ちを鳴らす。

まるで、野良猫だ。

彼女は全てのものに対して心を開かない。

彼女の周囲のアメリカ人たちにも、そしてイーサーにも。

アリッサが誰にも心を開かない原因はそもそも、彼らが知ることのない奥深い場所にあるのだろっ、とは思っ。しかし、どうしても、彼女自身に理解することなどできはしない。

もしかしたら、と、イーサーは思っ。

アリッサ自身がそれを知らないのかもしれない。

「あんたの茶番につきあってる暇はないのよ」

低く少女が告げた。

体の脇におろした両手にパチと音をたてて、火花が散る。

「知っているよ。姫にも、わたしにも、それほど時間はない」

淡々と男の声が響く。

「しかし、この国にあつて、イラン政府に守られているわたしよりも、姫のほうが圧倒的に不利だとは思わないのか？」

「さあ……？ どっちがより不利かなんてどうでもいいのよ」

イーサーにはイラン政府が。

そして、アリッサにはアメリカ政府がついている。

しかし、彼らが裏社会のひとりとして動く場合、それは必ずしも有益に働く事柄であるとは限らない。

「障害になるなら、叩き潰すだけのことよ」

自分の邪魔になるのならば、それらは全て「敵」だ。

かつて、ケース・アングリーボマーでそうだったように。彼女は自分の前に立ちはだかるものを、圧倒的な実力で叩き潰す。

「ふむ。そういうシンプルな考え方は嫌いではないな」

イーサーと、アリッサは決して短いつきあいではない。たとえば、アリッサが望むと望まざるとに関わらず、それは続いていく。

「……しかし、君はとてつもなく短気だからな。あまりこういった会話ばかり続けて、本当に吹き飛ばされるのはたまったものではない」

状況にはあまりにも似合わないイーサーの穏やかな声色。

クスクスと顔に火傷の痕の残る男は笑う。

その笑顔は、彼の武器商人としての冷徹な顔を知る者が見れば驚くほど穏やかだ。

優しく彼は笑う。

イーサーだって命は惜しい。

アリッサの願いを叶えてやりたいと思いながら、そんなに簡単な話ではないと言うことも理解している。

「……わたし、少なくともあんたの情報網は信頼してるのよ」

不意に表情も変えずに、アリッサはそう言った。

「それはうれしいね」

そしてまた、イーサーも平坦な声で言葉を返す。

「それで姫は彼がなにかに巻き込まれた、と？」

「あいつはイランに来たはずなのよ」

彼はアメリカを離れる前にそう言っていた。

少なくとも、アリッサにそれなりの知識をたたき込まれている青年だ。

そうそのことで不穏な事態に陥るとは思えない。

「ひとつ尋ねるが、姫が彼の能力を過信している、ということはあり得ないのかね？」

「わたしの見立てが間違いだって言いたいのか？」

間髪入れずにアリッサが言い放つ。

「いやいや、姫が見立てを誤るなどと思ってはいない。しかし、万が一ということもある」

そう言われてアリッサは無言のままで唇をへの字に曲げた。

「むかつく男」

数秒おいてから少女は長いまつげを伏せた。

「要するにそれって、わたしの見立てが間違ってるって言いたいんじゃない」

ぶすくれた彼女は、額にかかる金髪をかきあげる。

ラインストーンの入った花の飾りのついた金色のヘアピンで前髪を止めた少女は部屋の中央に据えられた豪華なソファに腰を下ろした。そうしてブロンドの巻き毛をくるくると指に巻き付ける。

どこか子供っぽい仕草を見せる彼女は、たった今まで目の前で殺戮の限りを尽くしてきた魔女のような女。

当初、彼女と白人の屈強な男が屋敷に乗り込んできたときは、男のほう危険人物であるのかと、屋敷を警護する若い戦闘員たちは思ったがそうではなかった。

なによりも危険なのは、金色の巻き毛の白人の少女。

ケース・アングリーボマーと呼ばれる事件がすでに過去の事件となり、マジックボムと呼ばれた殺人鬼への恐怖が薄れてきた若い世代の兵士たちは、アリッサ・ノースウッズの恐ろしさを知らない。

人間など愚かなもので、伝え聞いた恐ろしさなど正しく認識したりはしない。

「……こんなにも早くあなたが乗り込んでくるとは思いませんでしたので。火の鳥には大変失礼いたしました」

慇懃な男の言葉に少女は視線を投げかける。

やはりペルシア人のその男は、イーサーの側近だった。

文武両道を旨とする男で、イーサーの護衛でもある。

静かで穏やかな男の声に少女は、頭上の顔を睨み付けた。

彫りの深いハンサムな男だ。

彼は三十代半ばだが、頭も切れ戦闘能力も高い。その技術は元グリン・ベレーであるジョスリンとも互角かもしれない。

そんなインテリ面のペルシア人の男は、アリッサをアメリカの諜報機関がつけた暗号名で呼んだ。

少女の暗号名を、火の鳥。

男は、男なりにアリッサに敬意を払っているつもりだった。

「そもそもあんたが外出しているから、犠牲が増えたんじゃないかって？」

アリッサの言葉に、側近の男は柔らかに眼鏡の奥で笑う。

「そうは言いますが、一応屋敷を固めているのは、標準以上の实力を持つ戦闘員です。あなたのようなお人でなければ正面突破など考えにも及びませんよ」

「……あつそ」

たしなめるような男の声が少女は苦手だった。

確かに名だたる武器商人であるイーサーの屋敷であると考えれば、普通では考えられないほどのセキュリティが施されていると思われる。て当たり前である。その屋敷に殴り込みをかけようなど考えるのは、よほどの実力者が馬鹿だけだ。

「銃おろしていいわよ、ジョス」

少女はおもむろに背後でサブマシンガンを構えたままのジョスリンに告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402x/>

Unnamed child

2011年10月11日06時56分発行